
竜人の血

バシヨウ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

竜人の血

【Nコード】

N1691A

【作者名】

バシヨウ

【あらすじ】

主人公、アキとその友人三人は偶然、竜人になる木の実を食べてしまう。折りしも国内では反乱が起き、大きな事件に巻き込まれていく。国のすべての権力を支配するイキモノ、竜人となってしまったアキたちは、なんとか自分の生き方を取り戻そうとして、戦う。

プロローグ（前書き）

完全なファンタジーです。地理的なイメージは、千年ほど昔の朝鮮あたりでしょうか。

完結しているので、一日に一回、アップしていく予定ですが、長いです。例によってパソコン推奨です。

ごめんなさいー。

プロローグ

プロローグ

むかし、この国は欲深い人間達が治めていました。

しかしいつの頃か、一人の竜人がやってきて、王に言いました。

「私はこの国を気に入った。お前らにはもったいない」

贅沢な生活に慣れきった王は戦いを挑み、兵士も一緒に、みんな死んでしまいました。

千の軍は竜人の炎によって焼かれ、百の舟は竜人の羽によって沈みました。

その咆哮は大地を震わせ、この国にすむ人々を恐怖に包みましました。たった一人の竜人。

残ったのは多数の農夫と女性。それに子供です。

竜人は言いました。

「今日から私が王だ。君達を守る者だ」

この国は、その日から竜人を王に頂き、栄えるようになったのです。

初等部高学年向け、新説歴史童話集より抜粋

第一章・歯車（前書き）

後書きに人物紹介を記載します。誰が誰だかよくわかんねー、という場合ご覧下さい。

竜人の血

第一章・歯車

1. 開始

またロクヒトの病気が始まった。

これから何が起こるかを予測したアキは、大きいため息をついた。
「今度は何する気だよ？」

「ん、んー。そーだな。……何する？ アキ」

少し考えた振りをして、短く刈りこんだ髪をいじりながら、こちらに水を向けてくるロクヒト。

ロクヒトの知能は今ここに居る四人の中、否、村で一番だ。今はその上等な脳を使う気もないらしく、ぼうつとした目を投げかけてくる。

(おいおい、『暇だ何かすつぞ』って言い出したのはお前だろう？)
何度となく繰り返してきた掛け合いに飽き飽きしながらも、アキは律儀に暇つぶしを考える。

「うん？ 例えば……野球とか」

「たった四人で？」

「四人でもできるよ？」

小さな声で野球に同意するサリを、「はっ、もう飽きたよ」「一言で切り捨てるロクヒト。

今日のサリは、髪を後ろに縛って動きやすくしている。土色の学校指定の運動着はアキやロクヒトと同じものだ。

「おい……。ジュンはなんかねーのかよ」

急かすようなロクヒトの台詞に、土をいじくって遊んでいたジュンが慌てて向き直る。ジュンはいつどんな時でも私服だ。毎日のように着ている服を変えてくる。同じ服を着たジュンを、アキは見たことがない。

「え？ えっと、なんだっけ……」「いや、いいって」

ボケた表情で首を傾げるジュンを、片手を上げてアキは制した。

「なんだよ、結局お前らなんにも意見ねーんじゃねーか」

居丈高に言うロクヒトが気に障ったアキは、「じゃあロクヒトには何かしたいことがあるのか？」

「ふ、あるよ」

ねーよ、と逆切れするかと思っていた矢先の台詞に、アキは驚く。

「え？ 何かあるか？」

思い思いに時間を潰していたサリとジュンも、興味深げにロクヒトを見つめている。

「探検、だ」

その一言に興味を失ったアキは、再び空を仰いだ。あー、良い天気だ。

残る二人も似たようなもので、つまらなそうな表情を浮かべ、「うーん、どうしようか」などと話し合っている。

「おい、なんだよそれ」

「おいおい、探検？ なーんで高等部にもなってそんなもんに精を出さなきゃいけないんだよ」

うんうん、と頷く他二人。

順番に一人づつ眺め、ロクヒトは勿体をつけるように言った。

「……いいか、今回の探検はちーっと違うぞ。目的は『竜人墳』だ」

「う、……お、い。本気か？」

「うむ。真剣でござる」

竜人墳。文字通り代々の竜人達の墓だ。アキ達の住む村からはさほど離れてはいないが、言うまでもなく警備隊が常駐する、一級危険地帯だ。

立ち入りが許されているのは、王である竜人と、竜人になる権利を持った人間だけだ。

「それは、やめたほうが……いいと」

あまり意見を出さないジュンも、このときばかりは反対する。

「じゃあお前は家に帰って畑、耕すか？」

「え、い、いや。でも……」

口籠もったジユンを遮り、ロクヒトは続ける。

「サリは？」

「皆が行くなら良いけど、ね」

あつさりと流されるサリ。少しは反対しろ、とアキは叫びたくなつた。ここは俺しかいない。気合を入れてアキは言う。

「……俺は反対だ。あんなところに行つて何がある？ 無意味どころか犯罪だぞ」

「何があるかつて？ 何かあるかもしれないじゃん？ 竜人の使つた王冠とかさ」

いつも通り、あまりに平和な考えのロクヒトに怒りさえ覚えるアキ。

「死にたいのか？ 不法で侵入したなんてことがばれたら、俺ら罪人だぞ？」

「ばれなきゃいい。……この前から警備員の動き、観察してたんだがさ、二の時に穴ができるんだよ。竜人墳の図面も、ほら」

不遜、とまで言える態度で、地面に置いた鞆から一枚の紙面を取り出す。

「うわ、さすがロクヒトくんだねえ。計画は万全ですか」
感心したように図面を眺めるサリ。

「おい、おいおい貸せ」「わつとと、アキくん？」
取り上げて仔細に眺めるアキ。全て手書きのその図面は、侵入経

路から脱出計画まできちんと書きこまれており、ロクヒトの執念を感じさせた。

「お前、こんなもん、どつから……」

「ふふふ。素晴らしき情報化社会……なんてね。王立図書館に忍び込みまして、ちよろつと記憶してきました」

「くつ、お前、研修旅行の時か！？ 何考えてやがる、学校自体が潰れるぞ！」

「大丈夫、証拠は残さず綺麗なお仕事、つすから」

ぐつ、と親指を立てるが、威張ることではない。

「……まあ、いい。これは俺が預かる。責任を持って焼却しよう」

「え、ええっ?! おいおいカンベンしてよアキさん。俺がどれだけの苦勞をしてそれ書いたか分かるだろ?」

「うーん、そうだよ、ちよつと可哀想だよアキくん」

何を勘違いしたか、サリまで同意してくる。

「……サリ、よく聞け。お前はロクヒトを犯罪者にしたいのか?」

正確にはもう既に犯罪者だが、今ならまだ間に合う。アキが凶面を消しさえすれば。

「う、うん? 皆で渡れば怖くないっ、て言うし」

「ちがう! それは馬車の前だ!」

サリを相手にしていても埒があかないと見て取ったアキは、再びロクヒトを睨みつける。

「……ともかく、こんな危険な物は手早く消すに限る。竜人墳の身を知れただけで満足しておけ」

「それは……無理だ」

ぼつり、と俯いて呟くロクヒト。

基本的に騒がしいロクヒトには珍しく、暗い顔を見せる。

「何でだよ?! 竜人だぞ? 尊き者なんだぞ? 俺ら人間が関われることじゃないんだよ。お前にならわかるだろっ!」

「……知らねーよ。俺の家、もう駄目なんだよ。頑張ったけど、税が、払えねーんだ!」

血を吐くようなロクヒトの台詞に気圧され、アキはわずかにひるんだ。

「ジュン、お前は良いよ! 金持ちだからな。サリもアキも何とかやっていけるだろ。でも俺はもう駄目なんだ! このままじゃ秀学院に行けねえどころか、生きてさえいけねえんだ」

突然名前を呼ばれたジュンは、びくりと震え、おどおどとロクヒトを見上げる。

アキもサリも、何も言えなかった。

今期から、税の大幅引き上げが始まり、食っていけない家が続出していることはアキも知っていた。その一つがロクヒトの家だったことに驚く。

税を払えない人間は、王都での強制労働と、古くからの慣習で決まっている。

「だから、竜人墳から……」

「……盗掘するの？」

歯を食いしばり、背を向けたロクヒトにつなげる形で、ジユンが口を開いた。

「あのさ、そんなことよりさ。えっと、父さんに頼めば、融資してくれると思う、けど」

つまりながらもロクヒトに向けて語り掛けるジユン。彼にしては珍しいことだ。

「……友達に借りは作れない。そんなの、最低だよ」

ロクヒトの矜持は高い。初等部時代から神童として名を馳せていたロクヒトにとって、他人からの憐れみや救いは、かえって邪魔にしかならないのだろう。

今回の件も、助けてくれ、と言えずに、探検、という形で言い出したのが何よりの証拠だ。追い詰められた状況の所為か、結局は弱みを見せてしまったが。

「……うん。うん、よし、私は付き合おう！ 一人じゃ心細いもんね？」

わずかに続いた沈黙を破り、サリが手を上げた。

「お、おいおいサリ!？」

「……じゃあ、アキくんはロクヒトくんを見捨てるの？」
見捨てる、という言葉が、アキの心を責めた。

(そうか、俺がここで引いたら、こいつはもう頼るやつが……)

小さく心の奥で葛藤し、

「う、ううう。……くそつ。良いよ、やってやるよ」

「い、良いのか二人とも？」

顔を喜色に染め、抱き着いてこようとすろクヒト。ぐい、と押しとどめ、アキは最後の一人、ジユンに問い掛ける。

「お前は、気にするな。なんとか俺がこいつを助けるから。もしお前が捕まったりしたら……家にも迷惑がかかるだろ？」

「う、ううん、僕も行く」

ぎゅっ、と拳を握りながら返事をするジユン。

(置いていかれる、と思ってるのかな)

ジユンが着いてくるのは、まずい。

居ても居なくても、どころか。はつきり言つて、足手まといだ。

思いとどまらせようと、アキはゆつくりと諭す。

「ジユン、大丈夫だつて。無理することはないん……」

「ぼ、僕が！ 僕がいたら。父さんの名前を出せば、捕まっても殺されることはないよ！ だから、だから僕も、行く！」

初めてだつた。

十年間付き合つてきて、初めてジユンが大声を出した。

アキも、サリも、ロクヒトも、啞然とした表情でジユンを眺める。

「僕は、いやだ。皆捕まつて、次に見た時は絞首台の上なんてことになつたら……そんなことは嫌だ！」

ずつと考えていたんだろ。最初にロクヒトが竜人墳の話を出してきた時から。

顔を紅く染め、ぶるぶると震えながら叫ぶジユン。

「ぶ、あははは！ いーじゃんか。こいよ、みんなで一緒に、やるっぜ」

お前最高。そう言つてロクヒトはジユンに抱きつく。

「うんうん、やっぱ私らは四人いないとね？ アキくん」

「ああ、まあな」

アキは、足手まといだなんて考えた自分が恥ずかしくなつた。

ジユンだつて自分のできることを必死で考えていたんだ。

「大丈夫だ。全員、俺が、無事に帰す」

固く決意し、アキはそう小さくつぶやいた。

2・竜人

この国は、もう駄目だ……。

肩書きは宰相、とついているものの、マコトの実質の仕事は、竜人のお守りのようなものだ。

一昨年即位した、八十一代竜人。御歳十二歳。

小さいながらも、大空を駆ける為の翼や、炎を操る能力は、歴代の竜人にも劣らない。

マコトの仕事は、幼い竜人の育成、そして警護。秀学院を主席で卒業したマコトにとって、この役目は拷問のようなものだった。

「竜人様、今日は数学のお勉強のご予定ですが……」

「……あんなもの、何の役に立とうか？ 私はただ王座に座っていれば良いのであろう？ ……それに、代々の竜人達の記憶も、おぼろげながらに備わっている。不用だとは思うが」

最近では反抗期らしく、様々な理屈をもって勉強から逃れようとする。

それを論破して机に座らせる。毎日のように続く、子供との口喧嘩。マコトは大きいため息をつく。

「思考する能力を身につけるためなのです。全てを記憶に頼ってはいけません」

「しかしな、実質私には、政治に関わる機会は無いです。ただ承認するだけで」

「……いいですか、あなたは我らの王、竜人になられたのです。竜人が人間より無能でどうしますか？」

そう言うが、マコトにもこれが詭弁だとは解っている。竜人は、最早ただの飾りとなっている。人間を越えし者を議会は畏れ、それ故遠ざけているのだ。

「ああ、その通りだ、私は竜人になったことで、人としての名を失った。父も母も、私にかしずく。マコトは私をうらやましいと思う

か？」

問題のすり替えだ。甘えるな、と小突きたい衝動を抑え、静かに語りかける。

「いいえ。しかし竜人様の御父上は、是非とも貴方様を次代の竜人に、と申されましたが……」

「それは私の意思ではない。……そもそも竜人とはなんなのだ？」

「竜人、ですか。……遥か昔から我ら人間を治める、人間以上の存在、とでも申しましょうか」

「……しかし、私は一昨年までただの人間であつたぞ」

「いえ、正確には竜人候補、でした」

ふむ、と腕を組み、竜人は首を傾げる。

「だから、問うのだ。……竜人とは、ナニモノなのだ、と」

「それを、学ぶのです。この国の真の歴史と共に」

「ふ、む。そうか……まあ、良いだろう。今日は何だったかな？」

「まずは席にお着きになつて下さい。今教材を準備しますので……」

数学、などと言つたらまた議論が振り出しに戻ってしまう。巧妙

に話題をそらし、マコトは竜人を学問部屋に押しこむ。

(よし……後は数学の問題集を与えるだけだ)

基本的にこの竜人の知能は高い。質の良い教材を与えれば、どん

どんと吸収していく。マコトが嫉妬するほどの速度で。

それも竜人の力なのか、それとも元々備わっていたものなのかは

分からないが。

眉間に皺を寄せながらも、黙々と紙を埋めていく竜人に、ほう、

と小さく息をつくマコト。

(これで今日の課題は終わりだ……早く部屋に帰りたい……)

「……帰っても良いぞ？ 後しばらくかかるからな。お前も暇である」

分厚い問題集を恐ろしい程の早さで解いていきながら、竜人が告げる。

「い、いえ。ここで竜人様を警護するのも私の役目ですゆえ……」

マコトは背筋がぞつとすることを感じながらも、答える。
「そうか。気兼ねすることはないぞ……」

時折こういう事がある。

まるで、心を読んだかのような振る舞いをする。

だからこそ、恐れ、そして恐れるのだ。

人間離れた部分。小さく生える翼や、八重歯の様なキバといった、外見的なものだけではなく。周囲の人間を不安に陥れるかのような、言動。

まだ幼いが、確かにこの少年は、竜人なのだ、と感じる瞬間だ。

こん、こん、と控えめなノックが部屋の空気を変える。

「竜人様はそのままです……」

すり足でドアの脇に立ち、「何用か？」

「危急の用件です」

「所属は？」

「はっ。王室警護番役隊長付き、シカイであります」

隊長の秘書、のような立場だったか。腰に吊るした短剣に手をかけ、「入ってよい」

「失礼します……。竜人様に採決を頂きたく参りました」

床に平伏し、緊張の為か声を震わせながら話すシカイ。

「話すがよい」

問題に視線を落としたまま答える竜人。

「はっ。……来期の警護番にまわす予算の増額を願います」

「予算選考会の許可はあるのか？」

「はっ。……」

懐から数枚の紙片を取り出す。

「……マコト」

竜人の許可を得、確認の為に紙片を調べるマコト。

「問題は無いか、と思われませう」

「寄越せ」

マコトから奪い取った紙に、自らの手形を押していく竜人。右手

と視線は完全に目の前の問題集に向かっている。信頼の証か、面倒なだけか。

まず間違い無く後者だろうがな。

暗い考えを頭の隅に追いやり、数秒待つて墨を乾燥させる。

「これで良いな」

「はっ。ありがとうございます……。では、失礼いたします」

マコトから紙片を渡されたシカイは、喜び勇んで詰め所に戻っていった。

いつもこれだ。

マコトは気分が沈んでいくのを感じた。

既に竜人は傀儡となっっている。竜人を王とする、と言っても所詮名前だけの存在だ。今のシカイも、敬礼、視線、意識の全てはマコトへと向かっていた。意識的に竜人を排除しようとしているのだ。

(ならば、竜人の存在とは、何なのだ?)

先ほどの少年の問いが、重くのしかかってくる。

(いてもいなくても……)

「マコト……」

「はっ！ はい」

(読まれたのか?!)

マコトは、体中から血の気が引いていくのを感じた。

「……部屋に戻っても良いのだぞ?」

「い、いえ。また先ほどのような輩が来ないとも限りませぬゆえ……」

「……」

「そうか。……私は……いつか竜人による直接統治を復活させる。

そのときまでお前は、傍にいてくれるか?」

そんなことを考えていたのか。

子供のような外見とはいえ、さすがは竜人といったところか。

内心の驚きを顔には出さないよう努めながら、マコトは俯いた。

「御心の、ままに」

それから二時間の間、部屋は。さらさら、と羽ペンの動く音が支

配していた。

3・竜人墳

脱出の為の仕掛けを木に施しながら、アキは傍らのサリを見やっ
た。

そらでロクヒトと将棋をしているサリには、緊張感は全くと言っ
ていいほど見られない。

(これから何をするか理解してるのか?)

最後に力を込め、固く結び目を作り、ロクヒトを叩く。

「ケイマ、か……いてっ」

「終わったよ……ジュン、そっちはどうだ？」

「うん、もう少し……で」

音を立てないようにしているせい、まだしばらくはかかりそう
だった。アキはサリとロクヒトの間に座りこみ、順番に顔色を見る。
ロクヒトに緊張は感じられない。むしろ楽しみでしょうがないよ
うにも見える。

サリは……いつも通りにこにこと笑っているだけで、逆に表情が
読めない。

「お前ら、本当にわかってんのか？」

「なにが？」

こくり、と首を傾げるサリ。

「これから俺たちが何をするのか、だ」

「えっと、竜人墳に忍びこんで、金目のものを奪い去る、だよな」
不安そうに言うサリだが、それはこれで本当にあってるのかな、
といった不安で、侵入自体に危機感を持っているようには見えない。

「まあ、正解だが……ロクヒトは？」

「俺とお前がいるんだ。そう滅多なことにはならんだろ」

夏の水練場に忍び込むのとはわけが違うぞ、と突っ込みそうにな

つたが、ロクヒトにとっては同じ事なのだ、と気付く。

見つからなければ問題無いという考えなのだ。

(今まで少し、甘やかしすぎたか?)

ロクヒトがやらかしてきた悪戯のほとんどは、アキの事後処理によつて事無きをえてきたのだ。決してロクヒトの運や計画が優れていたわけではない。その事に気付いていれば、こんな計画は立てなかつたのかもしれない。

(今となつては、手遅れか)

「うん、そうだよ。ロクヒトくとアキくんが揃つた悪戯で、捕まつたことなんてないもんね」

今更のように感心した声を上げるサリ。

アキのしてきた苦勞を分かってくれているのだろうか？

「アキくん、運が良いから。多分今日も上手くいくよー」

わかつてない。全くわかつてない。今日の相手は警備隊、そして王国、竜人なのだ。

竜人が崩御すると、新しい竜人が必ず訪れる竜人墳。高貴な者しか入ることはできない、と言われる場所なのだ。

どれだけの警備なのか、そもそもアキ達が入っても問題は無いのか。

そもそも宝は存在するのか。

考えても仕方ない疑問だけが浮かび上がってくる。

「……ああ、そう、だねえ」

虚しくなつたアキは上の空で答える。

「ごそ、と立ちあがり、ロクヒトがジュンに近づいていく。

「ジュン、どこまで進んだ?」「え、えっと、もう少し……」「つて馬鹿、そこそうじゃねーだろ」

弱々しい声に、ロクヒトの叱咤の声が重なる。

「え? でも……」「んー、貸せ。……こうだ」

アキの位置からは暗くて良く見えないが、ロクヒトがジュンの持っている縄を奪い取つたらしい。

「あ、ああそつか……ごめん」

「こ、れで……終わりっ」と

アキは空を見上げる。月は天頂から少し傾いた程度。

「後少しで、二の時だ」

「ああ。復習するぞ？」

木に遮られ、僅かに覗く月明かりの中、図面を広げるロクヒト。

「ここだ」

図面を指し、次に木の陰から見える柵を指差す。

「すぐに二人組があそこを通る。通りすぎて、二十秒したら行くぞ。

……ほら来た」

じつと、動かずに、二人の警備員の動きを目で追う。

視界から消えた途端、ゆっくりとロクヒトが立ちあがる。

「……」

くつ、と親指を柵に向け、音を漏らさないように静かに歩くロクヒト。後ろにアキも続く。

森から出る時には緊張したが、辺りはしんと静まりかえって、どこからか虫の音がよく響いていた。

小走りに柵に近づき、中央の丸太を粹からはずす。

以前に一人できたロクヒトが仕掛けておいたらしい。

次々と開いた隙間に滑り込み、最後に入ったアキが、丸太を元の位置に戻す。

「ここからは走りだ」

極力抑えた声でロクヒトが囁き、四人は小走りで竜人墳の入り口へ向かった。

第一章・歯車（後書き）

アキ。十八歳。幼馴染四人組のリーダー格であるロクヒトを支える苦労人。二歳の時両親が病死し、孤児であったところをサリの家に引き取られた。

将来は、王都にある秀学院に進学が決まっている。

腕力、知能共に並以上のモノは持っているが、所詮天才には敵わない事を自覚している。

トラブル処理能力だけは一流。

第二章・動乱（前書き）

基本は三人称ですが、区切りを境にころころと視点が変わります。あらかじめ知っておくとまだ読み易いかもしれません。

第二章・動乱

1. 支配

外部の人間の侵入を想定していなかったのか、石の扉はあっさり
と開いた。

持ってきた松明に火を灯すロクヒトを確かめて、アキはごりごり
と鈍い音をさせながら重い扉を閉めた。

「順調だな……中には誰もいないんだろ？」

「ああ。今この墳墓の中にいるのは俺らだけ、さ」

ロクヒトも、肩の荷を下ろしたかのような態度で答える。表情も
柔らかい。

「んじゃ、出発しよー」

異常に重い扉を開閉したせいで、アキの腕は痺れていたのだが、
気にした様子もなくサリが立ちあがった。

「……まあ、いいけどさ」

手伝いもしなかつたくせに……、愚痴をこぼしながらもアキも立
ちあがる。

「おう、ささつと見つけてばぱつと逃げようや、な？ ジュン」「
うん……」

ロクヒトも陽気に続く。対称的に、いまだおどおどと辺りを窺う
ジュン。

「安心しろ、ジュン。確かに警備員はここを巡回してはいない。さ
つきの扉見ただろ？ 立派な苔が生え放題だったじゃないか……少
なくとも一、二年は誰も入ってないんだ」

「う、うん。そうだよね」

かすかに表情を明るくさせ、ジュンが頷く。ほどほどの緊張は、
むしろ良い方に傾く。

「まあ、油断はするなよ」

最後に小さく付け加える。

先導を切って歩くロクヒトがアキを振りかえり。

「じゃ、俺が先頭、次にジユン、サリ。最後はアキで。石室までは何も無いと思うけど……一応見逃すなよ？」

「了解。お前も気をつけるよ」

まったくもって順調だ。

先頭のロクヒト持つ松明が照らす、殺風景な石壁。整然としているが、一つ一つの石が大きいせいで、圧迫感がつのっていく。

(怖い、な)

ここは、怖い。

何千年も前に作られたという竜人墳。こんな物を人力で作った、当時の人々の執念や怨念を感じさせる。

どれほどの権力を持っていたのだろう。初代竜人の力は、それほどまでに恐れるものだったのか。

淡々と続いていく石壁に、絵が描かれた部分が出てくる。

例えばそれは大きな竜人の前にひれ伏す人間の姿だったり、太陽を仰ぐ竜人の姿だったりする。

どの絵をみても、必ず中心に竜人の姿があった。

「うわー、と素直に声を上げて感心するサリ。」

仔細に眺めたいのだろう。そわそわと、無言で歩くロクヒトと絵を見比べるジユン。

アキは、ゆっくりと絵から目をそらした。

描かれた古代人の竜人への崇拜の念に、飲みこまれそうだったから。

2・反乱

「今日はこれで終わりだな？」

二百枚はあった問題集をマコトに渡し、竜人は笑った。

「はい。以上です。明日は早朝から武術の訓練となります」

ふふ、と楽しそうに呟く竜人。

「そうか、それは楽しみだ」

「竜人様……」

「ああ、わかっておる。無闇に笑顔を見せるな、であろう？」

「はい……」

支配者たるもの、滅多なことでは笑ってはならない。常に剛毅な態度を取り続けなければ、民につけいられてしまう。

「不便なものだ……笑うことも制限されるとは」

「それが竜人様の務めでございますゆえ」

「わかっておる。ただの愚痴だ……下がって良い」

「はい。ではお食事の用意ができ次第、お呼びに参ります」

「うむ。……しばらくはここで仮眠を取る。遠慮せず起こすように」

「……では、失礼します」

音を立てずに扉を閉め、マコトは大きく伸びをした。

これでしばらく自由だ……。

（私も昼寝といこうか……？）

税を納めることのできない民の処理で不眠続きだったマコトは、そんなことを考えながら自室へと向かった。

（なんだ？）

猛烈な吐き気を感じ、浅い眠りを中断させられたマコトは辺りを見渡した。

いつも通りの部屋だが、何か違和感がある。

と、かたかたと小さく振動する硝子細工の置物に目を止めた。

（竜人様の能力だったのか？）

何事かと考えたところで、無遠慮な足音を聞き、不機嫌にドアを開けた。

「あなた、どうしたというのです！ ここは王宮ですよ！」

目の前を走っていた兵士を捕まえて問い質す。

「ああ？ ……し、失礼しました！ は、反乱です！ 王室警護番

役が反乱を起こしました!!」

何だこいつは、といった視線を送ってきた兵士が、マコトの階級章を確認してその場にひざまずく。

「な、に? ……警護番役、全員がですか!?!」

「はい!」

反乱だと?

まず兵士の狂言やただの流言を心配したマコトは、じつくりと兵の表情を観察する。

(正気だ……)

ありえない。

既にかりそめとはいえ、竜人の支配の元、この国は上手く動いていたはずじゃなかったのか?

ここで反乱を起こして、何の意味がある?

「……竜人様は?!」

「竜人様は……つい先ほど崩御なさいました……下手人は、警護番役の一人です……捕まえられず、申し訳ありませんっ!」

「なっ……! ならば、あの振動は……!」

死の際に竜人が上げた咆哮。文字通り断末魔の悲鳴だったのだらう。

マコトは膝が震え出すのを自覚した。歯をがちがちと鳴らしながらも質問を続ける。

「じよ、状況は……」

「はっ、残っているのは親衛四番隊、五番隊、です! 二番隊、三番隊は壊滅、一番隊は四番隊の指揮下に入っております!」

親衛隊は、一部隊につき五十名の精鋭が所属している。対して、王室警護番役は農民主体の兵だが、総勢六百人。とても、勝ち目が無い。

「たった、それだけ、ですか」

「はっ、はい」

「……司令部はどこだ」

「四階、会議室であります」

「わかった……行きなさい！」

はっ、と言い残し、駆けて行く兵士を見送り、力の抜けたマコトはその場にずるずると座り込んだ。

「く、ははは……カゼサキよ!!」

(カゼサキ……お前は一体何のために竜人になったんだ!? 竜人とは、何だ!?)

二年前から呼ばれることのなかった、マコトの甥だった竜人の名を叫び、泣きながら笑いだした。

このままではマコトまでも命を落とす。頭ではそう理解しながらも、座りこんだままマコトは笑いつづけた。

3・空白

三十分程歩きつづけ、疲労を感じてきたところで一度、休憩を取ることにした。

松明を壁に立て掛けたロクヒトが、三人で車座になった中央に地図を広げる。

「今、この辺だから、石室まで後半分つてところだな……」

埃っぽい空気の中での食事は気が進まなかったが、それも言っていられない。

鞆から出したパンを齧りながら確認していくアキ。

「もう半分かー」

水を飲みながら相槌を打つサリに目を向け、アキは、

「疲れてないか？」

「うん? 全然だいじょーぶ。むしろ楽しみかな」

「そうか。ジュンも……まだまだ余裕だな」

休憩するぞ、とのロクヒトの言葉を皮切りに、自らの松明を持ち出して壁の絵を観察しだしたジュン。一番心配だったのがジュンの体力だったが、意外と持ちこたえている。

「ところでき、ここ……なんだろうな？」

そう言ってロクヒトが指したのは、石室の隣りにある空白の部分だった。部屋なのか、ただの柱代わりなのか、それすらも判らない。

「ああ、そうそう。俺も気になってただけだ。ロクヒトの記憶違いか？」

まさか、というように首を振るロクヒト。

「俺がそんな手落ちするわけないだろ？ 王立図書館の地図も空白だったんだよ」

「空白、か」

どうしても秘密にしなければいけなかった、ということだろうか。
(ならそれは何だ?)

「宝物庫、とかか？」

「うん。確かにそれっぽいけど、な」

「しかし随分と広いな」

そう、石室の部屋の三倍はある。

ゆっかに校庭くらいの広さを占めるだろう。

「人柱の部屋、とか」

さらに、と恐怖を煽るようなことを漏らすサリ。

「や、やめろって。……宝物庫でいいんじゃないか？ 直接地図に書いたら不穏当だ、って判断したとか」

「うん、じゃあ、その線で行くか。石室の前にまずこの部屋を見ておこう……ジュン、そろそろ行くぞ」

ロクヒトが締めくくり、立ちあがってジュンを呼ぶ。

「う、うん。……わかった」

何をしていたかと思えば、ずっと絵を写し取っていたらしい。名残惜しげにちらちらと壁画を見ながら戻ってくるジュン。

「ま、明日の二時まではこの中だ。帰りにでもゆっくり見ろよ」
慰めるようにジュンの肩を叩き、再びアキ達は歩き始めた。

第二章・動乱（後書き）

ロクヒト。十八歳。幼馴染四人組を引つ張ってきた。自らの才能を過信する癖があり、後先を考えることが少ない。秀学院に入る実力はあるながらも、実家の窮乏のため、週に三日働きに出ている。

第三章・変質（前書き）

そろそろ物語が動いてきました。

竜人の血

第三章・変質

1. 白いりんご

「な、んだここは」

入り口以上に巨大な扉を（今度はロクヒトとアキの二人で開けた）くぐると、そこには一本の木が生えていた。

（いや）

生えている、というよりも、むしろ鎮座している、と言った方が
良いだろうか。

「……おっきな木だねえ」

うわあ、と感嘆の声を上げるサリ。

むしろ、大きすぎて気味が悪い。まさしく家一件分ほどの幹が、
絡み合って空高く伸びている。

見上げると、ここだけは天井が無いらしく、月明かりが一带を包
んでいた。

「木が、あるだけかよ……」

がっかりしたように首を振るロクヒトを残し、根元に駆けて行く
サリ。

「お、おいつ、サリ……」

どうでもいいや、と部屋を出かけた矢先のことだったので、慌て
て後を追うアキ。

後ろを振り向くと、だるそうなロクヒトやジュンもついてくる。

「あ、れっ。これ、りんごじゃない？」

一足先に根元にたどり着いたサリがこちらを見て指を指す。
りんご、だって？

「……本当だ」

丁度手が届く部分に生っている、白いりんご。

日が当たらないせいだろうか、病的なまでに白い。

「じゃあ、これ、りんごの木なのか……」

ふーん、と呟くロクヒト。

ぶちり、と一個だけ生っているりんごを採り、「食べてみないとサリ。」

「え」

そんな不健康そうな色をしたりんごなど食べたくなかったが、答えを聞く間もなく、手にした小刀ですると皮を剥いていくサリ。

「おいしいの、かな？」

興味深げに手元を覗きこみながら、ジュンが呟く。

「不味いだろう……多分」

とはいえ、アキもりんごなんて久しぶりだ。交通の便も悪い田舎に住むアキ達にとつて、森で採れる動物や芋以外のものは滅多に口にする事ができない。少し、食欲が湧いてくる。

りんごなんて食べるのは、二年前の新竜祭の時以来だ。

「あれ……？ 種が、無いや。変なの……ま、楽でいいけど。はい、四等分、ね」

四つに分けたりんごを配るサリを見るうち、アキも、まあ食べてみてもいいか、と思い始めた。

ジュンやロクヒトも同じようで、口の端がにやついている。

「じゃ、いただきますっ」と

齧りつき、一口、二口。溢れる甘い果汁が口の端を伝う。

(旨い……りんごって、こんなに旨かったか？)

すぐに食べきってしまった、アキはもう一度木を眺める。

(無いのか……一個だけ、か)

「残念……意外と旨かったのにな……？」

同意を求める感じで振り向き、アキは絶句した。

うんうん、と頷くロクヒトの背が、やけに盛り上がっているように見える。

にこにここと笑うサリの口の端に見えるのは……キバ、だろうか？

ジューンは一見何ともないが、良く見ると瞳が金に輝いていないか？
「おい……お前ら、一体？」

その場にへたりこみ、アキは気付く。自分はどうなのか、と。
ゆっくりと視線を自らの体に移す。

サリもお互いの異変に気付いたようで、慌てた様に口元に手を当てる。

ジューンもじりじりと二人から距離を取り始めている。

最も大きな変化をしたロクヒトはまだ気付いていない。

「……爪、が」

硬化化した爪が……まるで獣の様に長く。そこまで確認し、アキは叫んだ。

「なんなんだよ、こりゃあ！」

2・王都脱出

もう、ここはだめだ。

ようやくマコトが我に返ったのは、わずかに漂ってくる煙によつてだった。

どこからかぱちぱちと火が跳ねる音も聞こえてくる。さらに耳を澄ませば兵達の怒号、そして悲鳴も。

「くっ、くそ……」

こうなつては王宮から逃げるほか無い。死を覚悟して応戦する親衛隊には申し訳無いが、今マコトが死ぬわけにはいかないのだ。

部屋に戻り、銀貨と銅貨の入った袋を懐に入れ、短剣を腰に差す。襟元から階級章をむしりとり、適当に放り投げる。

金貨を置いていくのは勿体無いが、身元がばれてしまつては元も子もない。

机から伊達眼鏡を取りだし、かける。無いよりはマシだろう。

竜人用に作られた脱出路まで行き、燭台に指輪を嵌め、まわす。

カチリ、と鍵の開く音を聞き、辺りを見渡して開いた穴に潜り込んだ。

手探りで鍵穴を探し、もう一つの指輪を嵌めこむ。ガツン、と背後の穴が閉まり、ようやくマコトは一心地ついた。

（まさか私一人がここを使う破目になるとは……。情けない！）

闇の中、腹ばいになってひたすら進む。風通しの悪い抜け道に煙が入りこんできたらお終いだ。一刻も早くここを抜け出さなくては。

五分ほど進み、歩けるほどの通路に合流する。

擦れて破けかけている服を気にしながら、マコトは歩き出した。

「さて、どうしましょう……？」

歩きながら、反乱の裏側を想像する。

おそらく、あのとき予算の裁可を貰いにきた男。シカイ、だったか。

あの紙片に何か細工がしてあったのではないか。

今から反乱を起こす者が竜人に予算の融通を頼みに来るはずも無い。

「例えば……」

手段はわからないが、次代の竜人を王室警護番役の誰か……隊長、もしくはシカイ自身にする、と書き換えることができれば。

それは立派に反乱を起こす理由となり得る。最近の民は度重なる天災に苦しんでいたから、大方減税を大儀に立ち上がったのだろう。

「と、すると……次に向かうのは、……竜人墳か？」

当世の竜人が死んだことで、竜人墳の大樹には、白林檎が生っているだろう。食せば竜人になる、神の林檎が。

二年前、カゼサキもあの林檎を食べて竜人になった。

（あれを食われたら……反乱は完成する……！？）

「急がねば……カゼサキが亡くなった以上、私も竜人候補の筆頭です……。カゼサキ、貴方の遺志は私が継ぎましょう！」

竜人による直接統治。難しいが、マコトの頭脳と竜人の力があれ

ば、成すことは不可能ではない。

暗く沈んでいた気力を引き上げ、走り出した。

既に林檎は、四人の少年達の腹に消えてしまったことも知らずに。

3・四人の竜人

なんだこれ。今までの、皆。竜人達の、記憶？

部屋で眠っていたカゼサキが目覚ますと、目の前には剣を構えたシカイがいた。

剣を突き立てられたところまでを『思い出して』、ジユンは腹の底に怒りを感じた。

三人の乱れた気配が伝わってくる。

(頭が痛い)

悪い病気がかかった時のように痛む頭を押さえながらも、ジユンはゆっくりと落ち着いてきた。

おそらく、これは。

「……なんなんだよこりゃあ！」

叫ぶアキに、座りこんだサリ。ようやくロクヒトも気付いたか、背の翼をびくびくと動かそうとしている。

混乱の極致にある三人を見渡したジユンは、緊張を抑えこんで口を開いた。

「み、みんな。大丈夫!？」

「う、うん……なに、なにこれ？」

真っ先に反応したのは、固まったままのアキを心配そうに眺めていたサリだった。口元から牙が見え隠れする。

「み、みんなを、集めないと……」

「え？ う、うん……アキくん！」

少し離れていたアキに駆け寄りサリを確認し、ジユンはロクヒト

に近づいていった。

「ロクヒト、大丈夫？」

「あ、ああ。なあ、ジュン、俺の背中に、何か付いてないか？ 痛いんだけど」

「う、うん。まず、落ち着いてよ」

「……？ 余裕だな、ジュン。何か知ってるのか？」

不思議そうな目を向けてくるロクヒト。おそらくロクヒトには記憶が宿ってないのだ。

「うん……多分、今は僕だけがわかる」

「じゃ、じゃあ教えるよ。……それより、何が背中についてる？ 痛いんだって」

「……落ち着いて聞いてよ？ ロクヒトには、翼が生えてる」

「……？」

待ってて、そう呟いて鞆から小刀を取り出し、邪魔な服を切り裂く。

「お、おい」「黙ってて」

背の部分をほとんど切り落としてしまったが、これで楽になるだろう。

抑圧を取り払われて解放された翼が、大きくうごめいた。

「な、何これすっげー！」

ばさばさと翼を動かしながら、興奮した声で叫ぶロクヒト。一瞬で思考が止まったアキとは正反対だ。

理解しようとするアキと、感覚で生きていくロクヒトの違い。

どちらが良いというわけでもないが、パニックになることが無い分、どちらも優秀だ。

「う、わ。ロクヒトくん……？」

「お前は、翼か」

目を見開いて驚くサリと、ある程度事情を理解しているようなアキも戻ってきた。

「で、お前は何だ？ ジュン。暗闇を見とおす目、か？」

さすがに立ち直りが早い。

「ううん。記憶と、他人の感情を読めるみたい」

少し、顔をしかめるアキ。やはり気持ちの良いものじゃあないの
だろう。

「そうか、じゃあ、俺の考えも？」

「えっと、あんまり。怒ってる、とかそういうのだけ」

感情ははつきりと読めるが、言葉にするような思考は、ほとんど
と言って良いほどわからない。

「ふうん……じゃあ、記憶って？」

「代々の竜人達の記憶……ロクヒトにも話さない」と

はしゃいで辺りを飛びまわるロクヒトに視線を向ける。

（もう飛べるのか……それなりの訓練は必要なのに）

「おい！ ロクヒト、まず降りろ！」

ぶんぶんと腕を振りまわすアキに呼ばれ、危なっかしく着地する
ロクヒト。

「ぶはーっ。……楽しいな！！」

「うるせえ。今の状況、理解してるのか？」

「俺に羽が生えた」

「……ジュン、俺が説明しても良いか？ 間違ってる所とか足りない
所があったら言ってくれば良いが」

そのほうがジュンにとってもありがたい。

「う、うん」

その場に座り、アキは話し始めた。

「……多分、俺達は、竜人になっちまったんだ」

「！」

にわかに緊張した雰囲気を見せるロクヒトとサリ。手を上げて、
何かを言いかけた二人を遮り、アキは続ける。

「俺は、この爪。それに、体中に凄い力を感じる。ロクヒトは、翼。
ジュンは竜人の記憶と感情を読む力。えっと、……サリは、何だろ
うな」

「なんだろうね？」

不思議そうに首を傾げるサリ。補足が必要だろう、とジユンは口を開く。

「多分、炎を吐く能力じゃないかな……口からも吐けるし、慣れれば掌からも出せるようになる、と思う」

「ふうん……」

分かっているように頷くサリ。

口を開き、試してみようとするのをジユンは慌てて止めた。

「や、やめたほうが良いよ。後で、外でやってみよう？」

「うん？ わかった」

竜人の吐く炎は危険だ。全てを焼き尽くすまでおさまらない。

一段落ついたのを見て取ったアキは、再び話した。

「原因は、あの白い林檎だ。新しく決まった竜人候補が、あれを食うことによって本当の竜人となる、んだと思う。俺達はそれを四つに分けて食ってしまった。だから皆、中途半端な力を持つ竜人になったんじゃないかな」

間違いはないか、という目を向けるアキに、頷くことで返す。

「そういうこと、か」

納得したように頷くロクヒト。

「えーっと。他には何かあるかな……、ジユン？」

正しい。アキの言っていることは間違っていない。だが、ジユンには一つ、言うておくことがあった。

「うん。……何で、今林檎があつたか、分かる？」

「ん？ さあ、前の竜人が決まったのが、二年前だったよな。二年も経てば、普通に生えたんじゃないのか？」

違う。それは違うんだ。

「こ、この樹は自然に生えたものじゃない。初代竜人の遺体から生えたんだ。……林檎が生つたってことは、現竜人……八十一代目竜人の死をあらわすんだ」

「そ、そんな。代々の竜人は、不老になるんじゃない……」

ようやく、といった感じで口を開くアキ。サリとロクヒトは絶句してジュンの次の言葉を待つ。

竜人は、自殺によってその役目を終える。現、否、前竜人は即位して二年。アキがありえない、と思ったのも納得はいくが。

「……殺されたんだ。警護番役の一人に。反乱だ」

前竜人、カゼサキの記憶すらも受け継いだジュンは静かに語る。

「反乱、だと」

オウム返しに問うロクヒト。

「ひどい、話だよ。まだ小さかった竜人を……滅多刺しさ」

まるで、自分の身に起こったことのように。痛み、苦しみすら思い出せる。

「じゃあ、今いる竜人は、私たち四人だけになるの？」

何でもないことのように呟くサリ。分かっているのかな？

「……僕らは、決めなければいけない。竜人としてこの国を治めていく、覚悟を」

重々しく放ったジュンの一言に、再び場は緊張に包まれた。

第三章・変質（後書き）

サリ。十七歳。子供のころからアキを慕い、既に家族以上の存在として見ている。人の意見に反対することが少なく、基本的にはアキの意思に沿う癖がついている。実家の薬屋の手伝いをしていた故か、交渉に関しては自信があり、薬の知識も完全に頭に入っている。

第四章・戦い

1. 足止め

(間に合った……)

門から少し離れた暗がり、マコトはゆっくりとため息をついた。竜人墳を守る警備隊の動きに、緊張した気配は無い。まだ反乱の報は伝わっていないのだろう。

(伝令用の馬を盗んで正解だったな)

王都から三十分。早駆けの訓練を積んだマコトにも、この距離は初めてだったが。その甲斐はあった。

「何者か」

闇に響く門番の声。相手からこちらは見えない。

さて、どうするか。

忍び込むにしても、見つかってしまった以上手遅れだ。決心を決めたマコトは、正攻法で行くことにした。

「私は近衛分隊長、マコトです。危急の件により、竜人墳に立ち入りに来ました。通してくれますね？」

「は、はっ？」

理解できない者を目にしたかのように、辺りを見渡す門番。

「通してくれますね？」

威圧的に言い、一步近づき、「お、お待ち下さい」「門番に止められる。

舌打ちを隠し、「何か？」

「い、今隊長をお呼びしますので、ここでお待ち下さい」

「それは、駄目です。危急の件と言ったはず。事は一刻を争うのですか？」

「し、しかし……。ん、近衛隊の、マコトさま、ですか？」

「ああ」

門番の目が鋭くなっていく。注視しているのは、襟元だ。

「階級章は、どうなされました？」

しまった、暴徒を警戒して外したのがあだになったか。

(こうなったら……)

開き直り、隊長に面通しさせてもらうことにする。

「……途中で木にでも引つ掛けてしまったかもしれません。……それより、隊長を呼ぶのなら早くしてください」

「失礼ですが、本当にマコトさままで？　こんな夜更けにいかなる用があつてここに？　服も……随分と汚れていますな」

「……極秘です。この……」

まずい。完全に疑われている。こうなつては身の証明にすら時間がかかる。

「この隊長は、確かアラシですね？　いつ来るのです？」

マコトの顔を知るアラシならば意を察して通してくれるだろう。

だが門番は、

「隊長は現在、周囲の見まわりの任に就いております。もう二十分ほどで到着する筈ですので……こちらでお待ち下さい」

丁寧な口調は変わらないが、いつでも抜刀できるよう肩に力が入っている。

駄目だ。

押し問答してるこの瞬間すら惜しい。今、反乱軍が来てもおかしくは無いのだ。

「時間が、無いんですよ！」

「私の権限では不可能です。どうしても入りたいならば隊長と直接お話ください」

「く、くそっ！」

埒があかない、と見て取り、マコトは強引に門番の脇を駆けぬけようとした。

「やはりか……」

背後から投げられた、重りのついた縄が足首に絡みつき、マコト

は無様に転んだ。

「正体を表したか……竜人墳に、金目のものはないぞ！」

「ち、違いま……」

「黙れ。お前の良く場所は竜人墳ではなく、裁断所だ。……初犯ならば見逃してもらえるだろう。大人しくしておけ」

聞く耳を持たない門番に歯噛みしながらも、どうしようも出来ないと悟ったマコトは縛られるがままになっていた。

(二十分、か。間に合えばいいのだが……)

一刻も早い隊長の帰還を望みに。

2・困惑

「俺達四人で、この国を？ はっ」

悪い冗談だ。笑い飛ばそうとしたアキだったが、意外にも反応は薄い。

「……それも、ありかもしれんな」

ゆっくりと話すロクヒト。あまりの台詞に、アキは自分の耳を疑った。

「お、おい。本気なのか、ロクヒト？」

「本気？ ああ。これ以上無いほど本気だ。今の王国を見るよ。重税に民は疲弊しきっている。全ては形骸化した竜人の怠慢だ。俺たちが、新しく竜人の支配を復活させるんだ……！」

「お、俺たちは農民だぞ……それにまだ子供だ」

「前竜人も子供だ。十二歳だったか？ それに俺とアキ、お前は秀学院に行くことが内定していた。勤勉に過ごせば、行く末は竜人候補にもなれただろう。なんにせよ、大きな問題は無い」

どこからそんな自信がでてくるんだ。

「だ、駄目だ。俺達は不完全な竜人だ。議会が俺達を承認すると思うか？」

そもそも竜人になる為の儀式や儀礼を全く受けていないアキ達を

見逃すとも思えない。運が悪ければ処刑すらあり得る。

「……アキ。お前はどうしても反対する、と？」

立ちあがり、確認するようにアキを睨むロクヒト。

「……ああ。俺は、王には向かない……。降りるよ」

「ジユンはどうだ？」

「ぼ、僕も、気は進まない。代々の竜人は、決して幸福だったわけじゃないよ。僕は、……。これを機に、竜人の居ない国を楽しみに見守りたい、けど」

「じゃあ、サリは」

「私も……。あんまり。アキくんが駄目だって言うなら、ね」

「そうか。……。お前らを殺して、俺だけが完全な竜人になることもできるんだぞ？」

声に力を込めるロクヒト。アキも全身を緊張させる。

「やめる。一人で何が……。人間を捨てて、友達も捨てるつもりか？」

眼から力を抜き、はっつ、と大きくため息をつくロクヒト。

「ほんつとーに欲が無いなあ。みんな」

素直に諦めるロクヒトに、アキも肩の力を抜く。

ほつとした空気が流れ、新たに相談を持ち掛ける。

「……じゃあ、これからのことを話し合うとするか」

「これから？」

「ああ。竜人になつちまつた以上、俺達は自殺するか殺されるまで、このままだ。今まで通りの暮らしなんて難しいだろう」

「無理、かな」

下を向いて答えるジユン。

「無理だ。……。俺はこの国を出ようと思う。知りたいことを知り尽くすには、この国では狭すぎるからな」

今まで口に出さなかった、臃な夢を語るアキ。

人間には不可能なことも、竜人となったこの身なら十分に叶えることができる。

「ジュンは？」「ぼ、僕は……できるなら、カゼサキの、仇を討ちたい」

どもりながらも、しっかりとした意思を込めて言い放つジュン。

「カゼサキ？」

「前の、子供の竜人」

（そうか、ジュンは記憶も受け継いでるんだ）

「仇、か」

そわそわと、ロクヒト。

「それも、良いな。俺達の力があれば、反乱軍なんて目じゃないぞ

……！」

「戦うのか？ 兵士と」

「せっかくだ。自分のこの力、試して見たくないか？」

とても、とても魅力的な話だ。

「……力、か」

傍らの石を手に持って、握り締める。それほど力を込めた気もないのに、ぱきん、と音を立てて割れ、崩れる。

（人間相手に、この力、を？）

「それでは……虐殺になる」

「いいじゃないか？ 竜人とは言え、子供を殺して王になろうとした奴らだぞ。遠慮することはない」

「……う、む。サリはどう思う？」

「え？ えつと……隊長、っていうかその反乱を指揮してた人だけを……なんとかして殺すつてのは？」

迷いながら口にしたその案は、悪くないように思える。殺さないまでも、指導者を捕まえてしまえば乱が終わる可能性は高い。

「……そうだな。それで反乱は収まるはずだ。ジュン？ 隊長の名は分かるか？」

手っ取り早く収めるためには、兵達に向かい、自分達が竜人だと告白することになるが……仕方ないだろう。翼の生えたロクヒトを見れば一目瞭然だ。

「う、うん……僕、じゃない。カゼサキを殺したのは、シカイって
いう男。今の反乱軍をまとめてる、みたい……?」
言葉を途中で止め、辺りを見渡すジユン。

「ジユン?」

「た、大変だ、よ」

すぐに慌てて立ちあがる。

「ど、どうした?」

「逃げないと、早く……!」

あわあわと出口に目を向けるジユン。

「だから、何だよ?」

「あいつらが……ここに、入ってくる!」

尋常ではないジユンの雰囲気には押され、手早く仕度を整えるアキ。
サリヤロクヒトもそれに続いた。

「あいつらって……警備隊か?」

「違う……シカイ。……軍を連れて、ああ、あ、もう来る」

アキたちの見守る中、ゆっくりと、石の扉が開いていった。

3・対峙

兵と共に扉を開けたその部屋には何故か、四人の少年達がいた。

「ん……?」

後ろに控える兵に待機を告げ、シカイは少年達に向かって声をか
けた。

「キミ達、そこで、何をしている!??」

「……探検、ですよ」

長髪を後ろに撫でつけた少年が答える。両手を懐に突っ込み、態
度が悪い。目つきも腹立たしい。

(農民の子供風情が……)

シカイは怒鳴りたくなるのを抑え、一歩近づいた。

「目的はなにかね？」

「別に、知的好奇心の充足って奴ですよ」

彼は一人、後ろにいる少年をかばっている様に見えた。

「その、後ろにいる少年は？」

「い、イエ、何でもありませんよ……なあ口クヒト？」

「あ、ああ。特に何も」

「まあ、いい。……おい、捕まえる。殺しても構わん」

幾人かの兵に合図を出し、シカイは樹に向かって歩き出す。

う、うわああ、という叫びが聞こえる。

少年達には哀れだが、今ここにいた不運を嘆くしかない。

竜人墳に入りこむという事が、どういうことか。身をもって知ればよいのだ。

ゆっくりと樹を巡り、「林檎は、どこだ」異常に気付く。目に見えるどこにも林檎は生っていない。

竜人の死と共に一つだけ生る、というのは偽の情報だったのか？

「たっ助けてっ……！」「う、わあ化け物！！」「よ、よるな」「ま、まさか、竜人さま！？」

樹の裏側から聞こえてくる兵の叫び。先ほどの声も少年の声ではなく、捕まえようとした兵のものだったらしい。

（竜人、と言ったか！？）

兵士の言葉に全身に鳥肌が立ち、シカイは樹を周り、少年たちを樹の陰から観察する。

一人は、その背に生えた翼で空を舞い。

一人は、その細身からは想像出来ぬほどの力を振るい。

残りの二人はぼうつと逃げ回っているが……間違いない。

（ガキ共が……俺の林檎を食ったのか！！）

絶望と、それ以上の怒りに眼前が白く染まる。

（いや、まで、まだ終わってはいない……奴らを殺せば……また林檎は生る。そう、簡単なことだ、殺せば良い）

ゆっくりと、殺意を隠しながらシカイは、逃げ回っている二人に

向かい歩き出した。

4・不覚

(こんなに気持ちの良いものだったのか！)

壁に囲まれた部屋の中。空から兵の一人を蹴り飛ばしながら、ロクヒトは笑みを浮かべつづけていた。

最高だ。

また、アキに背後から近づいていた兵に体当たりをする。「ごっごつした床を滑っていく情けない様は、ロクヒトの自尊心を満足させました。

「まさか、竜人さまっ!?!」

「そうさ、かかってこい！俺達竜人に敵うものはいるのか!?!」

叫び、新たに飛びかかってきた兵の腕を掴み、高く舞いあがる。

「う、うわああ」

うるたえて暴れる兵を、サリ達に向かおうとする兵の集団に投げ飛ばす。

一気に隊列を崩しうるたえる兵。

段々と敵意が消え、逆に敬意をあらわし始めてきた兵も増えてくる。既に兵達の半分は剣を捨て、ロクヒト達に向かって平伏している。

(それより、残りの半分以上を止めてくれよ……)

また一人、アキが相手をしていた兵が吹き飛んだ。

武術を習っていたアキにとって、あの力は最高の相棒となっているようだ。

相手を殺さず、戦意を奪う。

悠長な戦いかただが、確実に相手の数は減ってきている。

(やはり俺達は王になるべき存在じゃないか)

ロクヒトとアキが敵を倒し、サリとジユンが政治に立つ。

微かに頭をかすめる、未来予想。

もう一人、ジュンに向かっていた兵に蹴りを入れる。

「す、すまん」

鼻を強打したらしく、鼻血を流して転げまわる兵。さすがに悪かったと思ひ、謝罪し。

無邪気な表情でアキを観戦しているサリに向かっていた兵……指揮官を眼の端に止めた。樹の後ろから迫る指揮官に、サリは気付いていない。

「ゆ、サリっ！」

「え？」

こちらに顔を向けるサリ。指揮官もロクヒトに気付かれたことで、勢い良く懐から小刀を取り出す。

（間に合うか？）

一気に翼を縮め、込めた力を開放する。

指揮官が小刀を構えたところで体当たりをし、ロクヒトも一緒に地面を転がる。

「う、ううっ？」

太ももに熱を感じ、ロクヒトは指揮官を突き飛ばして体を離す。じわり、と広がっていく赤い染みを見て、ロクヒトの怒りは沸点に達した。

「てめえ、竜人に向かっていい覚悟して、る……？」

ぶれる視界、力の入らない四肢。その場に膝をつくロクヒト。

「麻酔毒が塗ってある……動こうと思つな」

口の端から血を流し、ゆっくりと近づいてくる指揮官。

「く、っそ」

「さ、ロクヒトくんっ!!」

慌てたように体に力を込めたサリ。

「や、やめっ！」

青ざめ、必死で止めるジュン。

（まさか、ここで炎を、か？）

竜人の血

ゴウ、という音と共に。
ロクヒトの見る景色全てが、
紅く塗りかえられた。

第四章・戦い（後書き）

ジユン。十八歳。生来気が弱く、昔から家に籠もって絵を描いていた。偶然写生しているところをロクヒトに見られ、一方的に気に入られてしまう。

生家は31代、44代目の竜人を輩出したこともある名家。地方領主でありながら、中央に対してそれなりの発言権を持っている。

第五章・炭化

1. はぐれ

背後から猛烈な熱波を感じ、アキはその場に伏せ、ゆっくりと振り返った。

（樹が……サリか！？）

何かの冗談かのように燃えていく樹。根元の部分から広がる炎は、瞬く間に樹の表面を覆い尽くした。

「逃げろっ」

こんな近くであんなものが燃えたりしたら、死人が出る。そう判断したアキは兵たちに向けて叫んだ。

既に熱波は耐え難いものとなっており、ちりちりと髪の毛の先がたてる音が危機感を煽る。

先ほどまで戦っていた兵も、剣を下ろし呆然と樹を眺めている。

「早くここから逃げろ！！ 八十二代目竜人、アキの命令だ！」

見入られたかのように炎を眺める兵の肩を揺さぶり、耳元で叫ぶ。その言葉に正気を取り戻したのか、「は、はいっ！」小さく返事をし、気絶した仲間に向かっていった。

「おい、サリ、ジユン、お前らも……！」

サリに目を向けると、倒れたロクヒトの足に何かを巻いていた。

（ロクヒト、やられたのか？）

向かってくる兵がないのを確認し、アキはロクヒトに向かって駆けた。

「どうした……斬られたのか？」

「う、うん……毒があるって言ってた。ど、どうしよう！？」

（毒だっつて？）

ロクヒトの顔は白く変色し、大量の汗も流れている。息は荒いが、脈拍は少し速い程度で正常の範囲内だ。

「これくらいなら大丈夫だ……。多分」

サリが傷口に巻いた服の切れ端を、太ももの根元に巻きなおし、アキはロクヒトの体を背負った。

「逃げるぞ……。ん、ジyunはどこだ？」

「え？」

言われてサリもあたりを見渡す。

樹を覆う炎は、既に目に見えない程上部まで侵食している。大量の煙のせいで辺りの視界は最悪だ。

既に息も苦しく、目にも涙が浮かんでくる。

「ジyun!!!」

煙でしわがれた大声で叫ぶが、アキたち三人以外にはもう人の気配は無い。

あれだけいた兵たちも逃げ出してしまったらしい。

「ジyun! 聞こえてるなら、いつもの木の下で待ち合わせるぞ!」

返答は無かったが、今のアキに出来る事はこれくらいだ。いかに竜人とはいえ、これだけの煙や炎に巻かれて無事に済むとは思えない。

先にジyunが脱出したことを祈り、アキはロクヒトを抱え、出口に向けて走った。

2・隔離

縄で後ろ手に縛られた屈辱的な格好で、マコトは藁の敷き詰められた地下室で寝転んでいた。

湿気が多く、酷く不快だが、これはこれで慣れれば楽なものだ。

考えてみればこの二年間というもの、ゆっくりとした時間など取れなかった。

それを思えば、楽なものだ。ここの隊長であるアラシが来るまでの間、のんびりと考えを進めよう。いつそそんな気分になってきて

いた。

「しかし、この格好、どうにか……ならんものですかね」

壁に寄りかかるように体勢を変え、我慢していた息苦しさから開放される。縄で擦れた手首はじりじりとした痛みを伝えてくるが、大したことではない。

(反乱か……裏には誰がいるんだ?)

ようやく落ち着いた姿勢をとれたことで、マコトはこの事件についての推理を始めた。

昼過ぎに、王室警護番役隊長付きと名乗る男が、予算の裁可を得に竜人の部屋へとやってきた。

マコトも流し読みをしたただだったが、あの書類に不備は無かった。

(無かったはずだが……)

その後、日が変わってからすぐに、反乱を起こした。

反乱部隊の主力は王室警護番役。マコトが気付いた時には竜人は殺され、親衛隊の半分は壊滅して散発的な抵抗を続けるのみとなった。

(何故だ。竜人を殺し、警護番役に何の益がある?)

実質的な支配権は、閣僚とそれに連なる政治団体にある。竜人を殺し、さらに閣僚を殺したとしても、王国各地にいる政治団体までは手が回るまい。農民主体の兵にその後の政治を動かす力は無い。

(このままでは、大規模な内乱が起きる……?)

我こそがと、王国の勢力のほとんどがこの竜人境に殺到し、ここを主戦場とした内乱が起きる。

そうでなくとも、警護番役からの竜人を認めない領主が反旗を翻したら。

戦乱は長引く。そこに他国が突け込むのは時間の問題だろう。

真っ先に兵を送り込んでくるのは、海の方この国、麗だろう。長年こちらが擬似支配していただけに、恨みは深い。

もし竜人が代わりし、国も混乱の極みにある中、血気にはやっ

た麗の兵を抑えることができるか。

「……無理、ですね」

自らの想像に、ぶるりと体を震わせる。

それを阻止するには……一刻も早い支配体制を作り上げることだ。新たな竜人をたてて、王と仰ぎ、反乱軍を滅ぼし、屈服させる。

「……それなのにつ」

(私はこんなところで何をしているのだ！)

唇を切ったか、どろりとした感触が溢れ、顎を伝った。

「起きろ……、おい。起きろ」

マコトは、何者かに肩を揺らされるのを感じ、目を覚ました。知らぬうちに眠っていたらしい。やはり疲れはたまっている。

「アラシ……ですか？」

手を封じていた縄は、眠っていたうちに解かれていた。

「お前、何してるんだ？」

心配そうな口調で聞くアラシ。高等部卒業以来、まったく変わっていない。ぎつちりと詰めこまれた筋肉に、短い髪。それに似合わない優しい声が、辺りの者に安らぎと信頼を与える。

親衛隊の隊長の座を辞退してあえて地元を離れないのも、病床の母が心配だからという心根の暖かい男だ。

「聞いていないのですか？ ……反乱が起きました」

「……ああ」

答えるアラシの表情は重い。

「知っているのですか。なら早く……私が竜人になります。私なら、問題無いでしょう」

「……それは、手遅れだ」

沈痛な面持ちのアラシに、マコトは激昂する。

「ま、まさか王室警護番役を通したんじゃないでしょうね!？」

もしそうなら、最悪だ。政治のなんたるかも理解していない無頼に竜人の力を与えたらどうなるか。先ほどの空想が真実になる可能

性がある。

「ああ。通した、が。ありえない事が起きた」
ゆっくりと首を振るアラシ。

「なんです……それは」

「竜人の樹が、燃え落ちた」

今度こそ、マコトの脳は完全な怒りに支配された。

「き、貴様ーっ!!」

疲れを吹き飛ばす怒りに任せ、アラシの胸倉を掴み上げる。体格差のあるアラシにとって、その手を振り払うことは容易なはずなのに、大人しくされるがままになっていた。

「……すまん」

簡潔な謝罪に、一気に攻撃意思が消える。

（そうだ、何百人もの兵に迫られては、いくらアラシといえども開けないわけにはいかないんだ）

「い、いや。こちらこそ……八つ当たりでした。くっ、竜人はもう、生まれれないというのですか……!!」

土壁に拳を放つ。

（これから、どうする……？ 竜人がいない以上、この国はしばらく迷走を続けるだろう。なら、どうする……）

拳を壁に押し付けたまま、混乱していたマコトの思考を遮ったのは、アラシの一言だった。

「竜人は、いる」

「……そうか。そいつは、最後の竜人となるために、樹を燃やしたのか」

（絶対に、殺してやる）

「誰です！ そいつは！ 警護番役の隊長ですか？ それともシカイとかいう野郎ですか!？」

「う、む」

何故かアラシはいくばくかの間、逡巡していた。

「……教えてくださいよ、その、最後の竜人の名前を」

「……ああ、ジュンという地元の学生らしい。そのシカイが連行していたが……詳しくは知らないのだ」
「学生、ですか？」
しんと。薄暗い地下室に沈黙が落ちた。

3・囃

三時間。森の外れの木の下で、夜が開けるまでアキはジュンを待ちつづけた。

薬師を生業としているサリの父にロクヒトを預け、すぐにここに来たのだが、ジュンは来なかった。

（家に、戻ったのか？）

空腹を感じたアキは、辺りに耳を澄ます。

ざわざわと、木の葉ずれの音以外には特に何も聞こえない。竜人になったことで、聴力も上がっていた。

ある程度気配も探れるのだが、元々獲物がいないのならば何の意味も無い。

「ウサギでもいたら、捕まえたんだがなあ」

情けないほど力の抜けた声で呟く。

（帰るか……ジュンも家に戻ってるかもしれないし、な）

「よし」

気合を入れて木から体を離し、アキは村へと向かった。

村が視界に入ったところで、アキは足を止めた。
妙にざわついている。

（何だ？）

わき道に身を隠し、目を閉じて集中する。

「……犯罪」「領主補の家……斬首」「竜人……」「ジュン……」

「息子が……」

十分だった。

アキは一目散にサリの家に向かう。
「サリっ」

がらんとした土間には、誰もいなかった。
ロクヒトを寝かせていた布団に触れるが、すでに冷たくなっている。

「サリ!？」

「……アキくん」

家に響くように叫んだアキに答えるように、床板が外れ、サリが顔を出した。

「な、何でそんなところに……?」

「はやく、入って」

言い残し、サリは顔を引っ込める。

(どういうことだ? まるで、隠れている、ような)

不安を感じながらも、サリを追い地下室に滑り込むアキ。

松明に照らされた狭い地下室の中には、眠っているロクヒトと、暗い表情のサリがいた。

「どうしたんだ?」

問いかけるアキに、サリが答える。

「父さんが、兵に連れてかれて……隠れた方が良いと思って」

「兵士に? 樹の部屋に来た、あいつらか?」

「うん、多分……鎧が同じだったから」

反乱軍がサリの父を?

「それで、サリも、ロクヒトも無事だったのか?」

「うん……『娘さんはいますか?』って、それだけ。父さんが首をふって、それで、連れていかれて」

それならばまだ、アキたちがここにいるのは知られていない。

ほう、と息をつくアキ。

「ジュンの事は、聞いてるか?」

「あつ、うん。ジュンくん、……捕まっちゃったみたい……だね」

「詳しく聞きたいな……俺はずっとあそこにいたから分からないん

だ」

「うん。えつとね、明後日、王都で処刑されちゃうみたい。……勝手に竜人になったあげく、聖なる樹を燃やした罪、だって。広場に高札が刺さってた」

「そう、か」

腕を組み、しばし悩むアキ。

サリは泣きそうな顔で、

「助けに、行くよね？ ねえ、アキくん？ ……つな何とか、してよお」

アキが来た事で張り詰めていたものが切れたのか、ぐずぐずとしゃくりあげるサリ。

実際に樹を燃やしたのは、不本意とはいえ、サリの力だ。罪悪感を感じているのだろうし、ジュンを見捨てることなんてできないのだろう。

それはアキも同様だった。表には出さないが、既に計画は練り始めている。

「……ロクヒトは、どうなんだ？」

「つく、ロクヒトくん？ すぐ、良くなるって。神経が、麻痺してるだけだって……」

「いつ頃になる？」

「今日中には、治るって言うってたけど」

良かった。それならば成功の可能性は十分に高まる。

「わかった……。ロクヒトが治り次第、王都を攻める」

「ほ、本当！？」

途端に泣き顔を収めて抱き着いてくるサリ。

「や、やめっ、やめろってこら。……まずはロクヒトが復活しないと、何も出来ないんだから、さ」

空を駆ける能力。

ロクヒトの力と、竜人という『名前』があれば、そう難しいことではない。

(ジユンを助け、新たな治安を取り戻す。憂いを断って、旅に出る)
暗がりの中、静かにアキは決意した。

4・敗走

牢から出たマコトは、心身ともに疲れきっていた。

旧知の仲であるアラシに見逃してもらったとはいえ、マコトの身が危険なことに変わりはない。反乱軍にとっては是非とも殺すべき存在なのだ。

竜人になる術はもう、無い。

マコトに出来ることもまた、無い。

ただ、今後の成り行きを見守ることしか出来ない。

氣力を失ったマコトの足は、ふらつきながらも二年前にカゼサキと共に祭で来た、近くにある村に向かっていった。

以前マコトが来た時には活気が溢れていたその村は、暗く沈んだ霧囲気を辺りに発していた。

(まあ、前は祭の時期だったからな……)

広場まで足を進め、さらにマコトの違和感は大きくなる。
人の氣配が無い。

閉ざされた家の中からそっと、マコトを観察する視線は感じるが、外を歩く村人に一人も出会わない。

異常なことだ。

少なくとも畑仕事をする為に出歩かなければならないし、その農夫を相手にした食堂も活気がなければいけない時間帯だった。

広場の中央に立ち、ぐるりと辺りを見渡す。

がらんとした通りに面した家々があるだけで、時折吹く風の音が聞こえるだけだった。

(宿を貸してくれれば、ありがたいのだが……?)

そうでなくとも、旅をする為の雑貨くらいは買い揃えたい。最悪、

亡命という手段もとらなくてはならないのだから。

広場の隅に立てられた高札に目が止まった。

(この村に、何が起こったのだろうか)

ゆっくりと近づき、書かれている内容に目を止める。

『告

村民、領主補の長男ジュンは中央閣僚の正式な許可を取らずに竜人となり、あまつさえ竜人墳の遺跡を破壊した。

よって二日後、王都にて斬首が行われる。

この裁に不服とする者があれば本日中にその旨を書いた書状を提出すること。

次に共犯関係にある三人の身柄を引き渡すこと。

アキ、ロクヒト、サリ。

褒美は一人につき金貨二十枚。生死は不問とする。

隠匿した場合にはその者も斬首とする。

新王国宰相・シカイ

』

(新、王国だと?)

革命は成った、ということか。

ならばマコトにすることは本当に何も無い。

王国の関心が無くなるまで逃げつつけるか、国外に脱出するか、

の二者択一になってしまった。

(ならば尚更仕度をしなければ……)

多少焦りながら辺りを見渡すと、怪我・薬草という看板が目が止まった。

「薬、か」

長い旅になるだろう。薬も必要だ。

そんな考えで、マコトは薬屋の扉を叩いた。

5・助力

こんこん、と、扉を叩く音に、アキは身を固くして黙り込んだ。少しの間を置いて、もう一度。

「……誰だ？」

声を潜ませて聞くアキ。

「わかんない。父さんじゃないと思うけど」

同じく小さな声で応じるサリ。

ロクヒトに目を移すが、まだぐっすりと眠っている。呼吸も落ち着いていて、今すぐに目を覚ます様子はない。

「……薬が欲しいのですか？」

躊躇ったような、控えめな声を上げる訪問者。

「お客かな……」

「そう、かも」

アキは少し悩んだ。

どう対処すべきか。

「誰もいないのですか……？」

「いいかな？」

うずうずと、今にも板を跳ね上げて応対に向かおうとするサリ。

既に眼の端をぬぐい、涙の痕を消している。

確かに、客ならばこのまま返すわけにもいかない。緊急の場合もありえるだろう。

こくり、と頷くアキ。

「……はいはい、お待たせしましたー」

「う、うわっ？　なんでそんな……」

「あーいえいえ、薬の保存を確認してしまして……何のご用でしょう？　怪我ですか、病ですか？」

慌てたような男の声に、飄々とした感じで答えるサリ。はぐらかしにかけてはサリにかなう者はいない。

「え、ええ、実は旅の途中なんです。薬を切らしてしまいました。傷に効くのをいくつかもらいたいのですが」

「はい……切り傷、擦り傷、止血とありますが？」

「全部を。少しづつ袋に詰めてくれませんか」

「はいはい、少々お待ちを」

さすがに鍛えられているだけあって、客相手にははきはきと答える。

階段を上がっていく音が聞こえ、アキは胸をなでおろした。これならすぐに客も帰るだろう。

「……………うわああっ!?!」

「……………!?!」

突然ロクヒトが大声を上げて起きあがった。

「あれ、ここは?」

(こっこの、馬鹿が)

慌ててロクヒトの口を抑える。

地下室の入り口となる板は開いたままだった。サリが閉め忘れたのだ。

(まずいまずい……………サリ、早く!)

みしみしと床を踏む音が近づいてくる。

さすがに興味を引かれたのだろう。まずい。

どうしようもない。

(監禁するか? 旅人だというのならいなくなって騒ぐ者もない

……………しかし本当に旅人か? いやしかし)

「失礼……………おや?」

混乱するアキの思考も知らず、男は地下室に顔を突っ込み……………ロクヒトの口を塞いだままのアキと目を合わせた。

第五章・炭化（後書き）

マコト。二十六歳。幼少のころから神童として周囲の尊敬を得ていた。責任感が強く、自分の生き方に矜持を持っている。

尋常ではない努力で秀学院の主席に上り詰め、次期竜人は確実と言われていた。

カゼサキの父の必死の説得により、竜人の座を辞退したが、それを今でも後悔している。

第六章・計画

1．思惑

「実に、困った」

王城を乗っ取った王国警護番役は、そのまま名を変え、新王国警備兵となった。

隊長、分隊長クラスの人間はそのまま新王国の重鎮となり、シカイは現在の実質的な支配者である、宰相の肩書きを得た。

全ては前竜人に押させたあの書類のお陰だった。

予算案などどうでも良い。四枚目に書かれた一文、『シカイを次の宰相とする』を紛れこませる為のものだ。

(あのマコトとかいう奴も間抜けだ……まあ仕方ないか)

全ては慣習に基づいての判断だ。マコトの立場では仔細に渡って検閲する権利は無いのだ。

問題は、竜人となったあの子供達だった。

幸運にもその内の一人、ジュンという少年を連れ出せたのは良い。良いのだが。

(後三人……どうやって捕まえるか)

シカイが竜人になれなかった以上、これからの統治に、竜人の存在など無用だ。

むしろ邪魔にしなければならない。一人残らず殺すしかないのだ。

思案を進めながら、シカイは拘置所に向かった。

「具合は、どうだね？」

「い、いわげが……ない」

両の手を鎖に繋がれたジュンは、ぐったりと憔悴しきった顔をシカイに向け、弱々しく唾を吐いた。

人間ならば発狂するほどの自白剤を打ったというのに、未だ自我

を残している。あらためて竜人の強さというものを思い知らされる。肉体的な強さ以外に、生き残る為の強さを残している。しかし、所詮は動物のしぶとさに過ぎない。

「君は二日後の朝、処刑される。……思い残すことは、無いか？」

「ある」

「ふん？」

「お前を、ころせなかったこと」

目にはまだ光がある。

（まだ希望はある、というのか？）

「ふふ、しかし、君の村に行ったがお仲間はまだ捕まらなかったよ

……逃げ出したんじゃないか？」

「そ、んなわけない」

「本当に？ 危険を犯して君を助けにくる、と？」

「そう……だよ」

「まあ、どちらでも構わないがね。来たらその場で抹殺する。来なければ国内を歩けぬよう領主に伝える。どの道竜人の歴史は、君達で絶えるのだ」

「……黙れ。殺人者」

「……ああ、記憶があるんだったか。初めてだろうな。竜人を殺した人間は……すぐに断罪人という名の二人目が続くけどね」

「必ず、誰かがお前を、殺すよ」

不快だ。

「もういい、黙れ」

少年の喉めがけ足を振り下ろす。

「ぐ、うう」

それでも憎々しげにシカイを見つめる。

「……そうだな、一人くらいは残して、実験に使うとするか。……サリと言ったか、あの女ならば最適だろう。学者、も喜ぶ……」

殺気、を感じた。

足が震える。背には冷汗が湧き出てくる。

今までどうして平気で話していたのだろう。

少年とはいえ、竜人なのだ。

「そんなことをしてみろ……。三十二代目が考案した最も残虐な方法でお前を殺す」

数千人の奴隷を実験台に使ったという、『虐殺王』の名を口に出すジュンの目には、確かな殺意が浮かんでいた。

「……黙れと言った！ じゃあな、竜人様。この国は俺が動かす……安心して、死ね」

鎖に縛られた少年に恐怖を感じた自分を恥じ、顎を蹴りつける。

恐怖を押し殺し、勝ち誇った顔を見せるが、少年は涙を流しながらもシカイを睨みつけている。

（くそつ、何で絶望しない？ 竜人の誇りか？ たかが農民のガキの癖にっ）

怒りに任せ、力一杯扉を閉める。

これからもまた会議だ。

既に捕らえた竜人一人にかまけている暇は、無い。

力強く床を踏みしめ、シカイは会議室への扉を開けた。

2・邂逅

マコトは、地下室を覗き込んだまま思考が停止するのを感じた。

（何だ、あの翼は？ 何だ、あの爪は？ ここは、薬品の保管所ではなかったのか？）

「あ、あの」

固まったままのマコトに、強固な爪を生やした少年が語り掛ける。マコトが何度も目にしてきた、竜人の証となる爪。そして翼。間違える訳も無い。それはカゼサキと全く同じ形状のもの。

（何故だ。林檎は一つのはず……？）

そして、竜人はシカイたちに囚われたのではなかったのか。

「とりあえず、降りてきて……話をしましょう？」

「あ、ああ」

まったく状況が理解できていないマコトは、ただ従うことしか出来ない。

梯子に足をかけ、確かめるように下っていく。床に足がついた、という瞬間。

「すみませんね」

やけに強力な少年に腕を極められマコトは叫んだ。

「やっやめろ……！ 私は敵じゃありませんっ」

「それは、どういう意味です？」

「そ、その翼の少年っ君も止めてくだ……いたついたたた」

呆然と成り行きを見守っていた少年も、慌てて駆け寄ってきた。

「お、おいアキ、いきなり何してるんだ？ そいつは誰だ？ それにここはどこだよ」

「ここはサリの家の地下室だ……この人には悪いけどしばらくここで眠ってもらう」

落ち着いた物言いに、マコトはさらに焦る。

極められていた腕は開放されたが、今度は首に巻き付いてきたのだ。このままでは何もできないまま落とされてしまう。

アキやサリ、と言った名を、先ほど見た高札と重ね合わせる。

「だからやめてくれと言っているじゃないですか！？ 君達はあれでしょう、ジユンとかいう少年の仲間なんでしょう？ なら私は敵じゃありません、味方ですっ！」

マコトのその台詞に顔を見合わせた翼の少年とアキ。警戒しながらもマコトの手を離した。

「まず、座ってください……どこまで知っているんです？」

その場に腰を下ろし、マコトは極められていた手を振った。

「ああ、私は王国……いえ、旧王国近衛隊のマコトといいます。前竜人様を守れなかった腰抜けの一人ですよ……」

「な、そ、それは……どう、証明できますか？」

さすがに驚いた様子の少年だが、冷静だ。

「君は竜人の林檎を食べたのでしょうか？ カゼサキの記憶はないのですか？」

「……不完全なもので。四分の一なんですよ」

困ったように白状する少年。四分の一とはどういう意味か、聞き返したいのを我慢し、

「では……この服でどうでしょう？」

かなり汚れてはいるが、近衛隊の制服だ。少年がそいつた知識に疎ければ無意味だが、その心配は無かったようで、すぐに得心のいったような顔を頷かせる。

「なるほど、確か反乱を起こしたのは警護番役でした、ね」

「分かってくれましたか」

「ええ、もう一人呼びましよう……サリー！ 薬は良いから地下室にきてくれ！！」

表情を和らげた少年は少女に向けて叫んだ。

3・目覚め

竜人墳。大樹の燃え滓の中、うごめく影があった。

陰は自らの体に日の光を感じ、大きく咆哮を上げる。

影にとってはおよそ三千年ぶりの外気だった。

まだ立つことは出来ないのか、弱々しい動きで炭の山から這い出す。

数分後、二つの足で立ちあがった影は、再び咆哮を上げる。

自らがいた燃え滓を振りかえり、不思議そうに首を傾げ、影はその場に座り込み、瞑想をはじめた。

三千年に及ぶ記憶の検索、つまり、『思いだして』いるのだ。

自らの分身達に何が起こったのか。最後の記憶。カゼサキの死に様を脳裏に浮かべ、やがて影は立ちあがり三度目の咆哮を上げた。

怒り、そして辱めを受けた者の復讐の響きをこめて。

最後の咆哮は、遠く王都までも届いた。

4・策謀

「では、君達は四人で一つの実を分け合った後、あの樹を燃やしてしまった、ということですか」

「ご、ごめんなさい……炎があんなに強いなんて」

心底申し訳なさそうに頭を下げるサリ。

横目に眺め、アキは助けを入れる。

「仕方がなかったんです……彼女には戦う力が備わらなかったから」「いや、もうすんだ事ですよ……初めて聞いた時には絶望を感じましたが」

静かに語るマコト。アキたちの大先輩に当たる秀学院の主席卒業生だが、欠片も見下した様子を見せない。

アキたちが竜人となったこともあるだろうが、ある程度の能力を持つ相手とは対等に付き合うというのがマコトの性格なのだろう。

「それよりも、あの樹自体が謎に包まれているんです……こんな日がくるのも運命だった、ということでしょうね」

ふう、と達観したような目をどこかに向けるマコト。

「……貴方はさっき、自分を味方と言いましたね？」

「ええ」

「貴方に、何が出来ますか？」

直接的なその問いに、マコトは少し悩んでいるように見えた。しばらく口を固く結んでいたが、やがてゆっくりと話し始めた。

「……私は、前竜人、カゼサキの世話係をしていました。彼が死ぬ、数時間前にこう言っていましたよ。『私はいつか竜人の直接統治を復活させる』とね。しかしカゼサキは殺されました。シカイという男に……ああ、君達を襲ったのと同じ男ですね。」

さっきまでは、私に出来ることは皆無でした。だが今は、君達と

いう新しい竜人がいます。囚われたジュンくんを助け出す為、そして国を奪い返す為の知恵を貸すことができますが……どうでしょうか」

一度は諦めた復讐の成就、か。

「知恵、ですか。しかし俺達に国を統治する気は無いんです……」
「で、でも」

まだ未練は残っているのだろう。ちらり、と後ろにいるロクヒトに視線を送り黙らせ、アキは続けた。

「ただ、ジュンを助け、シカイを殺す為の知恵は欲しい。俺達にはあの王宮の中が全くわからないので……」

「カゼサキの仇を討ってくれば、十分です……。正直、シカイは憎い。カゼサキは、私の甥でもあったから」

悔しそうなマコトに、少しアキは同情する。

大切な人を、守りきれなかった後悔、か。

「……では、侵入経路からいきましようか。サリ、書くものはあるかな？」

アキに合図されたサリが背後の棚から、紙を取り出した。

新たな四人の相談は、深夜まで及んだ。

5・訓練

新たに作り出した炎を、サリは必死で抑えつけていた。

「そう、そのまま……手を使っても良い、そのまま宙に浮かせるんですー！」

離れたところから響くマコトの指示に従い、ゆっくりと持ち上げていく。

顔と同じくらいの高さまで上げたところで新たに注文が届く。

「そこに固定し、もう一つ左手に炎を作れますかー？」

「は……いい」

右手の上に炎を浮かせ、左手に意識を集中していく。

「ああっ……炎から意識を話すなあ！」

マコトの焦ったような言葉にサリが気付いた時には、保持していた右手の炎は暴れ、その力を辺りに撒き散らし始めた。

何度目かの爆発。

爆心地のサリの周り、二十メートルほどの地面がえぐれ、大きな石くれが炎に侵されていた。

何度と無く高温に晒された木々は葉の色を変え、細い蔦や枯れ木はこげ跡を残すのみと生っている。

「うつつ……いき、が」

咳き込みながらも慣れたもので、地面に這いつくばって空気を探す。

(情けないよ……なんで使いこなせないんだろう)

やがて煙もはれ、力を失った炎は燃え尽きていった。

まだ周囲は高熱に包まれてはいたが、今のサリにとっては程よい暖かさとしか感じられない。

熱いとは何となくわかるのだが、竜人の力が全ての熱量を遮断し、感覚器まで伝えようとしないのだ。

「はあ」

ため息をつき、半月状にえぐれた地面からよじ登り、マコトのもとへと走った。

「えっと、大丈夫ですか？」

耳を押さえてうずくまっていたマコトに手をかけ、声をかける。

「……あ、ああ」

「やっぱり、難しいです……上手くなってます？」

「私は、カゼサキの操る炎しか見たことがなかったのですが。上達は早い方です。むしろ早過ぎですね……一日二日で炎を手に生み出した例を、私は知りません」

「じゃ、じゃあ良かったんですか？」

「……まあ、良いでしょう。しばらくは一人で十分ですね。さつき

指示したことが出来たら、その二つを組み合わせてください」
では、ロクヒトの方に行くよ。

そう言い残し、マコトはよろよろと歩き去っていった。

「ふふ、なーんだ。安心安心」

一人笑みを浮かべ、サリは再び炎をその手に浮かべた。

「おっ?」

耳を押さえながらゆっくりとやってくるマコトを確認し、ロクヒトは居心地の良い空から地上へと降りた。

「ういつす」

「あ、ああ。順調ですか?」

「まあ何とか。師匠はつらそうですね? サリの爆発」

「気にせずに。……時間は無いので、成果を見せてください」

はいよ、森を睥睨できる程の高度まで舞いあがり、翼を限界まで引き絞る。

「ちよつ、と待て! 待つてください、……いいですよ」

慌てて近くの木にしがみつくマコトを視界の端に止め、ロクヒトは大きく翼を広げた。

辺りの空気が薄くなっていくのを感じる。息を吸い、目標とした林へと目を向ける。

嵐が来たかのように震える木々、積もった枯葉が吹き飛ばされていき……風は止まる。

「うーん? こんなもんです」

翼をゆっくりと広げ、マコトの脇に降り立つ。

「あっあれ? 大丈夫ですか?」

胸を押さえ、地面に倒れているマコトを揺り動かす。

マコトを抱え、影響が無くなるくらい離れたところまで飛び、再び肩を揺らす。

「あ、ああ……まあまあですね」

「で、でも随分苦しそうでしたけど」

「……伝承の通りならば、本来は完全な真空にできます」

「でもしたら師匠、死んでましたよ」

「……これからは自己流で磨いてください。私には君に教えることは何も無い」

「はいよー」

ぐったりしたマコトをその場に横たわらせ、ロクヒトは再び空へと舞い戻った。

(つくー！ 気持ち、いい！)

空を駆けるこの感覚、最高だ。

翼の無いサリヤアキを、哀れに感じるくらいに。

「おおおおおおー！！」

アキは、ゆっくりと息を吸い、そして咆哮を上げた。

枯葉が舞いあがり、木も細かく振動しているが、まだ思うほどの効果はない。

「ふむ」

何が悪いのだろうか。

マコトは、声を出さずとも相手を失神させることができる、と言ったが、よく実感がわかない。

後で見まわりに行く、と言っていたマコトもくる気配がない。

(助言くらいしてくれても良いと思うが……)

喉を使わずに、意識的に腹で声を上げてみるか。

再び深呼吸。

「っ！」

(ん?)

辺りの木々から大量の葉が舞い落ちる。横たわる枯れ木の一つが爆ぜ、欠片の一部がアキめがけ飛んでくる。

「今は……かなりよかったな」

目の前で破片を叩き落とし、満足して呟く。
もう一度だ。

息を吸いかけたところで、背後から枯葉を割る音が聞こえた。

「ありゃ」

振り向いたアキが目にしたのは、咆哮をまともにくらい、失神したマコトだった。

第六章・計画（後書き）

シカイ。二十九歳。地方の高等部を卒業後、王室警護番役に志願する。勤勉な性格を表に出し、着実にその地位を上げていった。竜人暗殺は、税収の増加により郷里が廃村になったことが動機。剣の腕、相手を煙に巻く話術、共に自信あり。

第七章・復活

1・シカイ

一日の会議を終え自室へ向かうシカイは、不可思議な動きを目にしてその足を止めた。

四階のテラスから見える城下町で、人々が集まって騒いでた。

（何だ？ 今日祭だったか？）

しかし祭や大会といった明るい雰囲気ではなく、緊迫感をその身に帯びている。

集団の数人は泣き崩れ、数人は当ても無く走りまわり、数人は夜逃げをするかの様に荷物を持って町を飛び出していく。

「な、ど、どうしたと……？」

ここにいっても何もわからない。急ぎ足で門へ向かい、王宮を護る警備に詰め寄る。

「何か知っているか？」

「いついえ、私どもにもなにがなんだか……」

「いい、門を開けろっ」

無能な兵を押しつけ、シカイ自ら町に出る。

間近で見ると、町の混乱は際立って見えた。

ひっきりなしに子供の泣き声が広場を包み、様々な人々の怒声がシカイの聴覚を刺激する。

先だつての戦で兵を減らした警備隊では、鎮圧は難しいのだろう。再編すらまともに終わっていないのだ。下手に刺激しては暴動すら起きてしまうほどに民衆は浮き足立っている。

「どうしたことが……！」

手近な者を一人捕まえ、問い詰める。すっかり怯えきつた風のその男は、辺りを気にしながらも切れ切れに話し始めた。

「りゅ、竜人様が怒っておるって……おばがっ！ 逃げないってっ」

死ぬって!」

「おばば、だと?」

「預言者だよ! 俺も、逃げる放せっ」

シカイの掴む手を強引に振りほどき、男もどこかへと走り去っていった。

「ふざけるなよ」

その預言者のつまらない戯言に、町人が混乱の渦に巻き込まれたということか。

(俺の町をつ)

また一人、噴水脇に座っている女性を捕まえて問う。

「おばばとは、どこにいるんだ?」

「先読みのおばば、ですか? ああ、この路地の……二つ目の角を曲がったら突き当たりにいますよ」

シカイはやけに落ち着いた女が気になり、ついでに問いかけた。

「感謝する……お前は逃げないのか?」

「ふふ、逃げてどうするんです? 竜人様は王なんですよ。民は傷つけません」

そこでシカイの格好を眺め、

「……あなたは、どうでしょうかね?」

「つく、黙れ!」

空いている手で女を殴り飛ばし、シカイは路地をつき進んだ。

突き当たりには、薄汚い布で覆われた小屋があり、『言葉屋』と書いた看板が吊り下がっていた。

「入るぞ……貴様がおばばとやらか?」

小さなランプに照らされる小屋の中。シカイと相對するように置かれた机の前で、おばばは熱心に薄汚い石ころの集まりを眺めていた。

なるほど、無知な町人ならば、神秘的とも言えるこの雰囲気に飲まれてしまうだろう。

「おい、何故竜人が来るなどという流言を飛ばした」

初めて顔を上げたおばばは、薄い絹の向こうで、楽しそうに笑った。

「くふふ、脅えてなさるか？ 大臣ドノ？」

「……俺は何故か、と聞いた！ 貴様も星読師の端くれなら、それがどれだけの騒ぎを起こすかわかっているだろう！」

「ふふ。それが真実だからだ」

「確かにそうかもしれない！ 二日後には三人の出来そこないどもが来るだろう、だがな、何故それを民に知らせた！？ 見たか？

無用な混乱が起こっているだろうが」

無用？ 無用、ね。小さく口の中で呟くおばば。

「何が言いたい……」

「無用じゃ、ないよ。……その金属筒を見るが良い……細かく、小さく、振動しているだろう？」

「あ、ああ。それが、どうした」

「それが、どうした？ いけないね、大臣ドノ。その台詞はいけないねえ。王国にはあるでしょう、竜人が伝える神話が……？ ああ、あなたは正統な宰相じゃあなかつたんだっけねえ。くふふふ」

神経にさわる話しかたをする星読みに、シカイの我慢も限界を越えた。拳を机に叩きつけて怒鳴る。

「説明しろっ！！」

「……これでもアタシんとは歴史が長い。その金属筒は、十何代前かのおばばが王室から賜ったものさ。伝え聞いた話だからよくは知らないけどね。『この筒の振動は、竜人の怒りの度合いでもある』って話さ」

小刻みに揺れる金属筒を眺め、シカイは鼻で笑い飛ばした。

「この程度の振動、何を恐れる？ この様に」

ぐい、と振動を続ける筒を握り、「簡単に止まるではないか？」

「恐ろしいのはアナタ、大臣サマの無知だよ……それが始まったのは今日の昼からだ。最初はエライもんだった。その筒が壊れるほどの勢いで跳ね始めたのさ……この老いた心臓も止まるかと思ったよ」

「昼から、だと」

「ああそうさ。前の竜人サマがお隠れになった時でも、かたかたと音を鳴らすくらいだったのに、ねえ。くふ、ふ」

今度こそシカイは肝を冷やした。

前竜人、カゼサキを殺した時の咆哮はかなりの威力だった。一日たった今でも内臓がきしみ、日に何度かは吐き気を感じるというのに。

「あれ以上、だと……？ きさま、おばばは何故逃げない!？」

「アタシは、ほれ、足が不自由でね。それに、アタシら民には手心を加えてくれるかもしれないじゃあないか？」

「くつ。貴様らの税を軽くしようとな努力したのだぞ!？」

「ああ、そりゃあ感謝するさ……でもね、竜人様は、殺しちゃあいけなかったのさ。アンタらは間違った事をした。だからその報いを受ける。くふふ、単純だねえ？」

「黙れ、黙れ黙れ!！」

これ以上聞いていられない。机を蹴り飛ばし、シカイは王宮へ向けて走り出した。

臨戦体勢に入った竜人は確かに油断ならない相手だが、決して不死ではない。千の剣、万の矢の前にはその命も耐えきれぬ訳がない。敵に対しては警備兵が確実に指揮を執ってくれるだろう。

(子供の、しかも四分割にされた竜人に、なんの恐れを抱くか!)

「負けない、負けない、負けない……」

周囲の雑踏の中、シカイは。自らの内に芽生えた恐怖をかき消す為に呟きつづけた。

2・動乱

大樹の燃え滓から甦った影……初代竜人は月の光の中、王都目指して風を切っていた。

彼は知っていた。

八十一人目の彼を殺した人間がそこにいることを。

殺された彼は、分身の中でも若い方だった。

風に涙を運ばせ、竜人は哄笑を上げた。

「舐められたものだっ」

大量の食事を探った竜人は笑いながらも、大きく裂けた口から炎の欠片をばら撒く。

「このつ竜人を殺す人間が現れるとはな!!」

目標が見え、竜人は翼を止め、その場にしばし佇んだ。

数十人かの逃げる民をその目に写したからだった。

殺さずにおくのは、彼に恐怖し逃げ出す民ならば、支配化においても従順でありつづけるからだ。

慈悲の心ではない。

最後の一団が城門から飛び出すのを見て数分の後、竜人の攻撃が始まった。

3・予想外

王都が燃えている。

アキは、空から周囲を警戒していたロクヒトの声で目を覚ました。

「な、火事か!？」

「違う……サリは、いるな」

馬車の御者席に降り立ったロクヒトは、幌をめくってサリを確認し、顔をしかめた。

「俺達以外の、竜人に襲撃を受けてる……のかな? 空から炎を吐いてやがる」

「竜人がいるのか!？」

驚いたアキは幌中のマコトを振りかえる。

「カゼサキ、は確かに殺されたはずです。そうでなければ林檎は生

らないはずですから……。他国に竜人がいるという話も聞いたことはありませんし」

マコトも、どういうことかわからないといった風に眉をひそめる。「……まあ、急ぐか」

アキは馬に鞭を入れ、馬車の速度を上げた。

街はひどいものだったが、その破壊のほとんどは王宮に集中していたおかげで、大規模な火災には至っていなかった。

家を失った人間より、国の象徴である王宮を燃やされて衝撃を受けている民の方が多いようだ。

広場に集まった数人は、街の遙か上方から炎を吐く竜人に平伏し、大声で許しを請うている。

ただ無意味に走りまわる少年、今更ながらに逃げ出す準備をしている食品屋。

「……暴動は、起きていませんね」

早足で王宮に向かいながら、安心したようにマコトは呟いた。

アキは後ろに続きながら街を観察する。

確かに、店を襲う人間はいないが。それはそもそも人がいないせいでもある。

王都にはありえないほどの寂しさだった。

「安心するには早いんじゃないか？ 王宮の後は街を狙うかもしれないぞ」

「……ええ。ですから、ロクヒト。足止めをお願いしますか？」

そう言つて最後尾を駆けるロクヒトに顔を向ける。

「お、俺が？」

「よく考えると、王宮内では空を飛べませんからね……。ある程度、彼の注意を引いてくれませんか？」

「おっ……。罔かよ？」

「そうです。死にそうになったら逃げてください。なに、ジュンくんを助け出すまでです。このまま続けばジュンくんまでも殺されて

しまつかもしれないので」

足を止め、翼を広げるロクヒト。

「……………くそ、急げよつ！！」

言い残し、竜人を睨みつけ、空へと飛び上がった。

「一人で平気、かな？」

迷ったように呟くサリ。

「まあ、大丈夫でしょう。彼はもう、歴代の竜人の誰よりも翼を自在に操っていますから。勿論あなた達も……………受け継いだ能力が一つだけ、というのが良かったんでしょうね。無理なくその習熟に集中できる。……………世界を滅ぼすことも、きつとできますよ」

重々しく話すマコトに、アキはサリと顔を見合わせた。

「ふふ、冗談ですよ。四人集まってからの話ですからね……………おや、門番も逃げ出してしまったようですね」

話しながら駆けている内に、王宮についた。

門は砕け、何者かの血の痕が生々しく道に溢れている。

「竜人、ですか……………これは衝撃波。ロクヒトの持つ力ですね」

破壊された門をちらりと眺め、マコトは吐き捨てるように呟いた。

「行きましよう……………こうなつては直接行った方が良い」

竜人用の通路を使う予定を変え、堂々と中央を通っていく三人。

見事なまでに人の姿が無い。

がらんとした吹き抜けがずいぶんと惨めに見えた。

断続的に襲ってくる振動や爆音を感じれば、逃げ出すのも無理もない事だろうが。

「……………この国は、終わりか？」

アキは呟き。足を止め、何かを考える。

「……………たった一人の、竜人、に……………？」

神話。初等部でいつか読んだ童話に思いを馳せる。

「何をしてるんです、急がないとロクヒトくんも持ちませんよ」

「あ、ああ」

サリに手を引かれながらも、アキはゆっくりと想像の中に沈んで

いった。

4・文献

シカイは王宮の地下に入り、禁書を片っ端から紐解いていった。兵のほとんどが逃げ出してしまい、今のシカイには知識で対抗することしかできなかったのだ。

シカイにとつて誤算だったのは、相手が完全な竜人だったことだ。
(何者だ、奴は!?)

欲しいのは、竜人の情報だ。

人の力で竜人を止めることが出来るのか。シカイは涙を流しながらまた一冊、流し読みした禁書を放り投げる。

学者ならば怒りを覚えるような光景だが、構ってはいられない。

新たに一冊の書を手に取り、ぱらぱらとめくる。

『竜人とは』

「ん」

気になった部分で手を止め、読み進める。四代目竜人の遺した記述だ。

『竜人とは、神にも等しい存在であり、完全に滅ぼすことは誰にもできない。私はこれから死ぬが、新たに五代目の竜人が起つだろう。所詮私は偽者の竜人であるが、初代竜人は本物の神であると言つてもいいだろう。彼は死ぬ間際、こう遺したとある。「飽きた。私はしばらくの眠りに就く。木を枯らすことのないように」と。彼の死んだ跡には一本の木が生え、その実を食べた学者が二代目の竜人となった。何故初代は、しばらくの眠りと言ったのか。私はこう考察する。いつか、また目覚める気なのではないか、と。自らの体に生えた木が枯れる程の事件が起こった時、再び目覚める気なのではないか、と。私はここに遺す。決して木を枯らすな。暴君を目覚めさせたくはないだろう』

発作的な怒りに体を支配させたシカイは、本を壁に叩きつけた。

「なんて事だ……！ 全てはあの女の策略だったのか……！」

シカイの脳裏には、炎を木に叩きつけたサリの姿が浮かんでいた。シカイの中でサリは、まがまがしい笑みを浮かべ、あざ笑うかのように樹を燃やして見せた。

事實はただの偶然だったのだが、脳を沸騰させたシカイは気付かない。

「どうする……どうする、どうする」

また爆発音が響き、何かか崩れるような音が頭上から聞こえてくる。

今までより一段階大きなその振動に、シカイは唯一の対策を思いついた。

「……竜人と、あいつらガキを戦わせれば良いじゃないか！」

サリの意味で樹を燃やしたのならば、そんなことを了解するわけがないという矛盾。

自らの考えの不整合にも気付かぬままに、シカイは立ち上がり。

ジュンを開放するために牢へと向かった。

不眠不休で続いていた会議。誰にも相談できぬ現実。決して立ち向かえない敵。起こり続けた想定外の事態に。

シカイは、静かに狂い始めていた。

第七章・復活（後書き）

カゼサキ。十二歳。親のエゴで竜人とされてしまった哀れな少年。その力はまだ使いこなせてはおらず、空を飛ぶこともほとんどなかった。

初等部での成績は優秀だったが、人付き合いを嫌い、一人で空を眺めていることが多かった。

人を疑うことを嫌い、その純真さが仇となってシカイに殺された。

第八章・復讐

1・牢

「十四回目、っと」

断続的に聞こえてくる爆音を数えていたジユンは、孤独にため息をついた。

他の牢に入れられた罪人達も悲鳴を上げ、必死に暴れている。

見捨てられることを恐れているのだろうか。

「違う、かな」

見捨てられたことに気付きたくないのだ。

(多分、初代が目覚めたんだ……)

四代目竜人が抱いていた恐怖を思いだし、ジユンはぶるりと震えた。竜人となってからの数日で、竜人の記憶もほとんどが回復している。

言うなれば、二日で数千年を生きた実感が湧いてくる。

決して樹を枯らすな、と初代と同じ事を言っただけを呟った四代目。まだ初代竜人の恐怖は生々しく語られていた時代だった。

「それが、燃えるなんてなあ……」

しっかりと説明できなかつたジユンの過失なのだろうか。

いや、歴代の竜人にも想像できなかつた。誰が竜人になる林檎を分けて食うなどと考える。誰が竜人自ら樹を燃やすなどと考えるか。

「やれやれ、だな」

腕にまとわりつく鎖を厭わしそうに眺め、ジユンは立ち上がった。牢に来る何人かの気配を感じたからだ。

(……断罪人とかいう落ちはやめて欲しいなあ)

階段を降りる三人の足音を聞き、他の罪人の叫びも増す。

だが、アキならきつと彼らを見捨てるだろう。

ここにいる君達自身の運が悪い、と言っただけ。

合理主義にして運を信じるアキ。
運良くアキの友達であるジュンは、自らの開放を予期して小さく笑った。

2・再会

ジュンを解放するアキを尻目に、マコトは辺りの罪人たちの牢を開けていった。

アキは軽く反対したが、マコトにはここにいる人々が哀れに思えたのだった。

全ての人に忘れ去られ、崩れゆく王宮の地下で叫ぶ彼らが、しきりに感謝をする女性や、一目散に逃げていく少年。

「気にしないことです……死ぬほどの罪を犯したわけではないのでしょう?」

そう言つて、しつこいほどに礼を言う女性を階段に押し出す。
アキたちに視線を移し、

「歩けますか?」

「ええ……大丈夫です、マコト。心配をかけたね」

一言も説明する前に、親しげにマコトを見つめてくるジュンに奇妙なものを感じたが、すぐに納得する。ジュンに宿った力は為政者として最も重要な、記憶と経験。

当然、カゼサキの記憶も受け継いでいるのだろう。

「……説明は不要ですか?」

「大方予測済み、だよ。初代が怒っているんでしょう?」

あっさりと言うジュンに、その場の三人は凍りついた。

「初代、ですって?」

「ああ。そうか、マコトも知らなかったのか。樹を、燃やしたでしょう? それで初代が目覚めたんだ」

「……樹を、燃やしたせいで?」

自らの過ちを指摘され、その場に腰が抜けたように座りこむサリ。

慌ててアキが手を引いて立ち上がらせる。

「気にするな……いつかくる日が今来ただけのことだからな」

「うっ、ん。……でも、私が、勝手に炎を吐いたせいでこんなに、つく。王宮も……」

犯した行為に泣きだし、しゃくりあげたまま動こうとしないサリ。

「ごめんなさい、ごめんなさいっ」

「……サリだけのせいじゃないよ。しっかり説明できなかった僕も悪いんだから」

「お前、なんか、変わったな」

マコトも少し驚いていた。気弱な少年と聞いていただけに、胸を張ってサリを慰めるジュンは、意外に思えた。確固とした意思と、身に纏う余裕。

既に王としての風格を備えている。

ああ、と事も無さげに答えるジュン。

「竜人の記憶、さ。……サリ、今僕達に出来ることは、初代をもう一度眠りにつかせることだ」

「私、たちで？」

「そう。僕達にしかできない。それが、樹を燃やしてしまったことの償いになるんじゃないかな？」

「……できる、かな」

「できる。僕が保証するよ。ね、アキ」

突っ立ったまま呆然と二人を眺めていたアキに話を振るジュン。

ジュンの変わりように驚いていたのだろう。目を瞬せながらも応じる。

「……ああ。俺達の手で、初代を殺せば、全て終わるんだな？」

「うん。終わらせる」

静かな決意をその目に満たしたジュンは、マコトの目から見ても素晴らしく頼りがいがあるように感じた。

「ん、……静かに」

何者かが階段を降りる音にマコトは警戒し、腰から剣を抜いた。

今この状況で牢に向かう人間が味方のはずは無い。
顔を見合わせ動こうとする三人を片手を上げて制し、階段の脇にある牢に身を隠す。

（誰だ？）

息を潜めて訪問者を待つマコト。程なくしてその男は現れた。

（……シカイ？）

すぐ横の牢にいるマコトには気付かぬまま、シカイは驚いたような顔で三人を見つめた。

3・敵

竜人は、つまらなそうな顔で破壊を続けていた。

始めのころにあつた散発的な抵抗も鳴りを潜め、ただ荒れ狂う炎になすがままの王宮を見つめる。

「この程度か」

竜人が眠りについた三千年前から、何も変わっていなかった。

解っていたことだったが、失望の念はぬぐえない。

「つまらんっ！

おおっ！！」

再び咆哮を上げる。

耳を押さえて悶える民を見て竜人は咆哮を止め、ため息をつく。

「情けない」

手に炎を生み出し、王宮に投げつける。

高くそびえ立つ尖塔を破壊し、一瞬胸がすくような感触を覚えたが、欲求不満、そして怒りは収まらない。

「……ん」

街の中央から誰かが近づいてくるのを確認し、竜人は再び生み出した炎を消した。

新たな竜人だろうか、と期待を込めていたのだが、目の前に現れたのは中途半端な少年だった。

ただ人に翼が生えただけの存在。竜人にはありえない弱々しい肌、黒い瞳。

失望はしたが、竜人でもなく、そして人でもないその少年に興味を引かれた竜人は話しかけた。

「……何者だ貴様？」

「俺は、八十二代目竜人の、ロクヒトだ！」

「竜人、だと？ 貴様が？」

鼻を鳴らす竜人。

「……今この国にいる竜人は、私以外にはいない！ 貴様、私を竜人の祖と知つての直言かつ！！」

竜人を侮辱するような存在に大口を叩かれ、自分でも信じられないような怒りを覚えた彼は、大きく翼を引き絞った。

ロクヒトも同じように翼に緊張を込める。

「死ね」

真空を作り、目の前の少年に叩きつける。

少年もまた、生み出した衝撃波を竜人に向けて放った。

互角。……いや。

「何者だ、貴様は」

わずかに押し負けた竜人は、小さな鎌鼬によっていくつかの傷を負った。

信じがたい事態に、彼の体が震えた。

「何者だ！」

「……四分の一、さ」

自嘲するような笑みを浮かべ、再度翼に力を込めるロクヒト。

「……つくそ！！」

何が起こっているのか、目の前の少年は何者なのか。理解できないままに、ロクヒトとの距離を詰める竜人。

ロクヒトの放つ衝撃波。何度も繰り返されては細かな傷とはいえ、致命傷となりうる。真祖が逃げるわけにもいかず、やけになったとも言えるその判断は結果的に正解だった。

近づく竜人に、慌てて翼を広げ離れるロクヒト。

接近戦は苦手。

その行動は如実に現実を語っていた。

「ふ、ふふ……私に傷をつけた事、後悔するがいつ……！」

一瞬でも怯んだ事実を掻き消すかのように、竜人は高らかに笑った。

4・復讐

「久しぶりだな、小さき竜人達」

アキは、目の前の青年の余裕に首を傾げた。

たった一人でこんな所に来て、何をするつもりなのか、と。シカイのすぐ横に隠れているマコトも、不審感からか動けないでいるようだ。

「何の用だ？」

瞳に危険な色を浮かべるジュンに落ち着くよう耳打ちし、アキはシカイを睨みつける。

「用？ 勿論取引にきたんだ。……君達がああ暴れている初代を殺してくれたら、王の名を献上しよう」

「は？」

理解できない物言いに呆れかえったアキは、まじまじとシカイを眺める。

「王の名だけでは不服かね？ ……ああ、当然名前だけではなく、権力もつける」

「な、何を……」

「どうした」

「いまさら、何を、言っている？」

「だから……君達は王になりたくはないのか？」

無邪気に、不思議そうな表情で話すシカイに我慢が出来なくなっ

たのか、とうとうジュンが飛び出した。

「ジュンっ！ やめろ！」

「な、何をっ」

ジュンの手が彼の手にかかる寸前、隠れていたマコトがシカイを押し倒す。

「な、何故そいつをかばうんだ!？」

ジュンは焦り、マコトに非難の目を向ける。

(まさか、シカイを殺すな、と言いたいのか?)

アキも不安にかられる。カゼサキの記憶を持つジュンは納得しないだろう。自らの仇にも感じられるシカイを見逃すなど、とても考えられないだろう。

当然、アキ自身も見逃すなんて思っていない。

「ん？ おや、マコトくんではないか？ 君も彼らに頼んでくれな
いか？」

マコトに押し倒されながらも朗らかに笑うシカイの姿に、アキはようやく理解した。

(シカイは……恐怖を感じていないのか?)

現実から逃げ出してしまったのだろうか。正常なら気付かぬわけもない。

目の前のマコトから感じられる殺意を。

「……アキくん。……行ってください」

「は、い？」

「私はこいつを殺します。これ以上無いほどの残虐な方法で。……サリさんに見せたくは、ないでしょう。……そして、ジュン、すみません。私に殺させて、下さい」

態度を決めかね、硬直したように動かないジュン。

「私が、殺さなければいけないのです。……カゼサキを護ることができなかつた、私が」

「ええ？ 何を言っている？ 今はそれどころじゃないよマコトくん」

唇を噛むマコトと、気が抜けるシカイの言葉にジユンは肩の力を抜いた。

「…………お任せします」

「サリ、行くぞ。…………ロクヒトだけでは初代の相手は荷が重いだろうから、な」

へたりこんだままのサリに声をかけ、ふらつきながらも立ちあがるその体を支える。

階段に足をかけたところで、ジユンはマコトを振りかえり、言った。

「…………カゼサキは、あなたを恨んでなんか、いませんでした。いえ、それどころか。死ぬ間際まで、あなたに感謝していましたよ…………！」

「……………ありがとう」

小さく響くその声が濡れていたのは、アキの気のせいではなかったと思う。

第八章・復讐（後書き）

アラシ。マコトの同期であり、成績優秀ではあったが、アラシ自身が剣に重きを置いていたため、実線部隊に配属されることとなった。人の役に立つことを生きがいとしている。

第九章・戦争

1・敗北

決して狭いとは言えない空の中、ロクヒトは追い詰められていた。必死の形相で逃げるロクヒトの背に、炎を、衝撃波を、咆哮を浴びせる竜人。

「そんなものか!？」

(ああ、そんなものさ)

すでに諦めすら感じていた。

狩る者と無力な獲物、という図式が完成してしまっている。

ロクヒトの能力、真空からの衝撃を放つには、ある程度のためが必要だった。

ほんの数秒ほどのその隙を、竜人は決して見逃さない。

速度の勝るロクヒトが離れると咆哮を。翼に力を込めると炎を。特攻しようとするれば衝撃波を。

ロクヒトに出来ることは、中距離で逃げ回ることのみだった。

(まあ、それでも……目的は達成できるんだけど、ねっ!)

時間差で放たれる四つの火球を丁寧に見極め、また少し距離を取る。時間を稼ぎさえすれば、アキとサリが加勢に来る。連れてくるジユンの戦闘能力はまったく当てにならないが、混乱した兵に殺される可能性を無視できる分、闘いに集中できる。

(気に食わない……、が)

竜人の祖。

ロクヒト達が分けて得た全ての力を使いこなし、永い時を経て甦った化物。

(個々の能力で見れば……俺の方が強い!)

先ほどの狼狽を忘れたかのように王者の微笑みを浮かべる竜人を睨み、ロクヒトは翼を止めた。

「……あんだ、なんでこんな事をするんだ」
唐突な口クヒトの問いに、竜人も攻撃の手を休め、視線を合わせる。

「城の破壊、のことか？」

「……」

無言でもって先を促す。

「わからないのか。……やはり貴様は竜人ではないな」

軽蔑の色をその目に浮かべ、「復讐……いやいや、賤だな」

「しつけ、だと」

「王に刃向かったのだぞ？ あの、シカイという人間は。力の差、格の違い、頭脳、経験、危機管理。自らよりも全てが劣る相手を貴様は何と呼ぶ？ 以前、人間はそういう存在をこう呼んでいたよ……奴隷と」

予想以上に傲慢な思考に、口クヒトは歯を食いしばる。

（怒るな……冷静になれ）

「俺達は、竜人の奴隷か」

「俺達。俺達、か……はは、っははは！！」

突然空を仰ぎ、哄笑を上げる竜人。

「な、なんだ？」

「貴様、まだ人間のつもりでいるのか？ 先ほど自分の言ったことを忘れたのか？ 『八十二代目竜人』と抜かさなかったか？ ははは……っ！ もう一度聞けぞ。貴様、何者だ？」

その口を笑みの形に歪める、白髪の竜人。

「お、れは。竜人だ」

「人間ではないのだな？ ……奴隷の猿を卒業した、半端者の竜人なのだな？」

「俺は半端者じゃ、ねえ！」

竜人は楽しんでいる。口クヒトをいたぶり、舌戦で圧倒し、歓んでいる。もしくは挑発のつもりか。

（……千年単位で眠りつづけていたんだから、な。会話にも、闘い

にも飢えているんだ)

もうじきアキが来る。それまでをしのげれば、ロクヒトの勝利だった。

「……ふ、ん。だから半端だというのだ」

ゆっくりと手を、否、人指し指をロクヒトに向け、嘆息する竜人。「私は、感情を読めるのだよ?」

竜人の言葉と同時に発せられた、集中された火の糸はロクヒトの右翼を貫通し、瞬時に傷痕を焼いた。

「あ? ……ああああああつ」
翼に力が入らない。

(遊んで……からかっていたのか!!!)

片翼を欠きバランスを欠いたロクヒトは、初めての墜落の感触というものを感じた。

猛烈な悔しさに全ての痛覚が消え去り、暗くなる視界の中。ゆっくりと遠ざかっていく竜人を睨み続けた。

2・闘い

空の一角から、どちらかの竜人が落ちていった。

アキは見つめ、続くジユンに問い掛ける。

「あれは……どっちかわかるか?」

「ロクヒトの負けみたい……僕達にむけて謝ってる」

悲しげに顔を歪ませるジユン。

「じゃあ、生きてはいるのか」

「う……まずい、止め刺そうとしてる」

「サリつ、炎を竜人に放て!」

米粒ほどの大きさの竜人に当たるとは思わないが、注意を向けさせればそれで良い。

アキの意を察したか、小型の炎を十数個生み出し、次々と放つ。

「……命中した、か？」

「わからない、けど。すごく怒ってる。来るよ」

「ジユン、お前は離れてろ……俺とサリで倒す」

「……うん。ロクヒトを見てくる」

そう言い残し、ジユンは城門へと向かって駆けて行った。

アキは辺りを見渡す。王宮の中庭にある広場……おそらく訓練場だろう。

学校の校庭三つ分程の広さを青芝が覆っている。サリの周りの芝は熱気にあてられてかその色を変えていた。

「サリ、炎はどこまで扱えるようになった？」

「うん？ えつと……数はさっきの十四個が今の限界かな。大きさは……これくらい」

両の手を広げ、抱え込む程の大きさを表すサリ。

「そうか。……まず俺が接近戦をしかける。もし上に逃げたらサリは翼を狙ってくれ」

「うん、やってみる」

「もし敵わなかったら……」

アキの言葉を遮り、竜人による風圧が広場を満たす。

「……その時は逃げるぞ」

頷くサリから目を離し、眼前に降り立った竜人を睨みつけた。

「炎を放ったのは貴様らか？」

「まあな。あんた、初代なんだって？」

「……初代、か。くはは。二代目も三代目も所詮は偽者。代理に過ぎんよ。私は真祖、貴様らの長だ。何故刃向かう？」

「知ったことか。……竜人による支配は、もう古いんだよっ！」

叫び、腕を組んだままの竜人に飛びかかるアキ。

上段への蹴りを、身を屈めてかわす竜人に向け、そのまま踵を振り下ろす。

右の腕でその足を掴まれたのを見たアキは残った左足で竜人の顔を蹴りつける。

「むっ」

驚いて掴んだ手を放す竜人に、体勢を崩したアキは飛び退り、再び距離を詰める。

（次は、その翼をもらおう）

マコトからもらった短剣を抜き、翼を狙い切りつけるが、わずかに体を動かされアキの体が泳ぐ。

そこに竜人の前蹴りをくらい、大きく距離をとる。

「っ！」

（剣の扱いは……知らないんだよなあ）

主に素手での修行を続けていたアキにとって、短剣に頼る戦いは未知のものであった。

市井に伝わる武術の目的が心身の鍛錬である以上、農民であるアキには必要がなかったのだ。

「貴様も、半端な竜人か……その爪を隠せばま人間として生きていけるというのに、何故敵対する？」

その手から次々と炎を放ちながら、竜人は独り言のように呟く。「言っただろ……人間は人間の力で生きる。三千年の昔とは違う！

サリ、耳を塞げ！」

大きく息を吸いこみ、横に飛んで火球を避けたアキは、「おおっ！！」咆哮を浴びせる。

王宮全体を包む重低音に、竜人はその動きを止め。アキは再度飛び掛っていった。

3・罪

「あなたを、断罪します」

静かなマコトの宣言に、シカイはゆっくりと顔を上げた。

「断罪？」

「竜人をその手にかけた罪、王都を混乱に陥れた罪。親衛隊の命、

警護番役の命。それらを無為に貶め、失わせた罪。あなた一人の命で償えるものではありませんが、大人しく神にその身を捧げなさい」
蔵かに呟き、マコトは腰の剣を抜き、上段に掲げた。

「俺は、腐った竜人のいない国を創りたかったただけだ！俺に罪は無い！」

「では何故竜人墳に行ったのです？自分が実権を握るためでしょう？」

振り下ろしたその剣は、シカイの肩を打った。

竜人を守る者としての証。刃を落とした長剣である。痛みに悶えるシカイを冷たく見据え、もう一度打ち据える。

さらにもう一度。肩の骨が折れた感触が手に伝わる。

もう一度。膝の骨が碎ける。

もう一度。肋骨を砕く。

もう一度。腰の骨に当たり、角度が悪かったかマコトの腕に痺れが走る。

「う、ううううああ……な、ぜだ」

地面に突っ伏し、涎を撒き散らしながらシカイはマコトを見上げた。

「何故。この後に及んで何故ですか。……カゼサキに賜りしこの剣によって、地の獄へと落ちるがいい」

聞く耳もたんと、所構わず滅多打ちにする。

自由にならない四肢を動かし、マコトから少しでも離れようとするシカイを見るにつれ、マコトにも後悔の念がよぎる。マコト自身の復讐の念が薄れ、ただの情性で剣を浴びせ続ける。

（この男の罪は確かに大きい。だが、命を奪うほどのことだろうか……いや！カゼサキもそれを望んでいる！）

「……死に、た、く、ない」

うつ伏せに倒れ、頭を庇うことしかできなくなったシカイに、マコトは剣を振りつづける。

マコトは気付いてはいなかったが、その剣先は徐々に腕や足とい

った、致命的な部分を避けるような部分に移動していた。

（これは断罪だ。カゼサキの意志を継ぐ私がやらなくてはいけないのだ）

「駄目です。死ね」

マコトが諫めていた、カゼサキの柔らかな笑みを脳裏に浮かべ、決意を固め、渾身の力を持って剣を叩き下ろす。

その剣はシカイの頭のすぐ横の地面へと当たり、音を立てて折れた。

狙いを外してしまったマコトは呆然と折れた剣を眺める。

「……なぜ、わたしは」

シカイは気を失い、時折痙攣するのみとなっていた。

（……殺せなかった。いや、殺さなかった）

骨を砕かれ、横たわるシカイを仰向けにし、機械的に怪我の具合を確かめていく。

折れた肋骨の位置を直し、脱臼した部分を嵌めていく。

「……生き残る」

このまま適切な治療を施せばシカイは助かる。

殺すべきだ。

頭ではそう理解していたが、これ以上動けないシカイを痛めつける気にはなれなかった。

「もう、いいです。断罪なんかではありません。……これは、ただ私の復讐でした。カゼサキを理由にしては、いけませんね」

確認するように呟くマコト。

「後は牢の中で一生を償ってください……」

扉の開いた牢にシカイを移動させ、扉を閉める。

猛烈な高熱と痛みに襲われるだろうが、運が良ければ助かる。その程度の怪我のはずだった。

「カゼサキ……あなたの願い、叶えましょう」

二度と顧みることもなく、マコトは牢を後にした。

4・阻止

竜人は、体中に走る悪寒を抑えきれずに膝をついた。

予想した以上に強い低周波に、体が耐えきれなかったのだった。

片方の鼓膜も破れたらしく、遠くから耳鳴りのような音が聞こえてくる。

(まずい……)

アキが構える小刀では、竜人の命を奪うことはできない。だが翼を切り裂かれては非常に不利な状況に陥る。

目の前に立ち、次々と刃を繰り出すアキの腕を取り、直接咆哮を食らわせようと口を開ける。

しかし即座に喉を掴まれ、息自体ができない。

少しづつ動くようになってきた腕でアキの腕を掴むが、尋常ではない力によってそれも適わない。

締めつけられた喉からはめきめきと嫌な音が響いてくる。

(この、力は……なんだ)

明らかに竜人は劣っていた。

ロクヒトには翼で劣り、力ではアキに劣る。

(私は、わたしは……真祖だ)

「くっか、は」

「ごきり、と声帯が潰れる感触。

「ぎ、さま……」

無言のままアキは、喉を掴み持ち上げたまま、片手に握った小刀を翼に突き立てた。

「……っ！」

息も吸えず、悲鳴すら上げることができない。

ゆっくりと翼を切り裂かれる感触に、竜人の頭は赤く染まった。

白濁する視界の中、無意識のうちに炎を生み。

竜人は喉を締め付ける圧力から開放された。

地面にひざまづきながらも顔を上げ、離れたアキを見ると警戒し

ながらも大きく息を吸っている。

(炎を嫌った……?)

「おおお つー!!」

びりびりと辺りが震えるほどの咆哮。覚悟していただけに、先ほどよりはダメージは少ない。

さらに大きく息を吸おうと構えるアキに向け、残った翼を操り、竜人は真空を作る。

目標は小さい。アキの顔の周りを真空にすれば。

「うっああ?」

肺の空気を全て目の前に現れた真空の空間に吸い取られ、うめくアキ。さらに鎌鼬が全身を切り裂く。

後方に下がっていた少女が悲鳴を上げ、駆け寄ってくる。

(逃げなければ……早く!)

少女はアキに構い、竜人には目も向けない。

逃げるなら今しかなかった。

鋭い痛みを堪え、竜人は飛び上がった。

空を追う手段は無い。炎にさえ気をつければ、逃げ切れる。

(次……だ。次こそは……)

高く舞いあがり、アキからの追撃が無いことにふっと気を抜く。

「が、ああ!」

次の瞬間。竜人は、胸を貫く衝撃に力を奪われ、ゆっくりと墜落していった。

(何だ。何の能力だ?! わたしは、こんなちからなんて知らない……)

5・死

シカイを牢に放置したマコトは医療室へと行き、医師にシカイの容態を告げた。

逃げようともせず怪我人を治療していた医師は、マコトを睨み

つけると自ら牢に向かった。

「すまない……」

医師にはここに残って患者を診ているように言われたが、残っている怪我人はいずれも軽傷で、これ以上の処置をする必要を感じなかった。

医療室を出たマコトは、そのまま武器庫へと向かった。

（彼らだけでは、竜人は倒せまい）

雑多に溢れる剣や鎧を押し分け、マコトは奥の壁の前に立つ。

その手に嵌めた指輪を、叩きつけるようにくぼみに合わせ、そのまま体重をかけ押ししていく。

重い音を立てて滑っていく壁の脇から中に入り、目当ての物を探す。

中には百を越える薬品漕が整然と並べてあった。

最も奥にある硝子瓶を手に取り、中身をボウガンの矢の先に染みこませる。

透明な液体が鉄に反応し、見る間に紅く染まる。次々と矢を薬品に浸していく。真紅に色を変えた矢が十本を越えた所で、満足して硝子瓶を元に戻す。

次に、壁に掛けられた剣を一本手に取り、腰に刺す。

これは、禁中の禁。

竜人を殺す毒。

城に勤める者の中でも、親衛隊のそれぞれの隊長とマコトしか知らない研究。

いつか来る、竜人の暴走の為に進んでいた研究だったが、まさか本当に使う時が来るとは思わなかった。

静かに息をつき、マコトはバルコニーへと向かった。

幾度となく轟く咆哮によって生じた吐き気を抑えながら、マコトは事態の推移を見守っていた。

倒れるアキに、寄りそうサリ。

アキの猛攻に、『倒せるか』とも思ったが、やはり竜人の総合能

力には勝てなかった。

ケリは、マコトがつけるしかなかった。

襜褕切れの様になった翼を動かし、空へと逃げる竜人へと、ゆっくりとボウガンを構える。

倒れたアキに安心したか、その動きを止める竜人。体を城門へ向けた瞬間を狙い、マコトは矢を放った。

胸を押さえ落下していく竜人を確認し、マコトは新たな矢をボウガンにつがえた。

第九章・戦争（後書き）

竜人。自らも正確な年齢を知らない。西方で生まれ、郷を飛び出した後、まだろくに文明の発達していなかった国に目を着け、その礎を作った。

長い年月の間一人であった為、寂しい、という感情が自覚できず苛立っている。

第十章・裏切り（前書き）

今回は後書きにそれぞれが得た能力を書いていきます。

第十章・裏切り

1．疑問

上手く動かない翼を広げ、ロクヒトは王宮へと向かっていた。何度も響く空気の振動は、アキと竜人が争うものに違いない。おそらく、ロクヒトたち四人の中ではアキが最強だろう。

接近戦では、武術の師範代をつとめるアキに分があり、もし離れても咆哮を放つ。

それを堪えて上空に逃げたとしても、今度はサリの炎が襲う。

少なくとも、サリが共にいる限りアキに負けは無い。

無いはずだったが。

竜人には幾度も戦いを生き抜いてきた実戦経験がある。

もしそれにアキが対応できなければ、痛い目を見ることになってしまう。

よろめきながらも、何とか門の前まで飛ぶことができた。

(ここからは、走るか)

傷ついた翼をたたみ、ロクヒトは中庭へと駆け出した。

中央の渡り廊下にさしかかった所で、階段を上るマコトが目に残る。手にボウガンを持ち、集中していたのかロクヒトには気付かずに、そのまま二階へと消えた。

(あれで援護する気が……)

少し迷い、ロクヒトもマコトの後を追った。

手負いの竜人へ奇襲するとすれば、少しでも高い場所からの方が有利だ、と見越していたことだった。

長時間の飛行は無理だが、姿勢を整えることくらいはまだできる。

この、ほんの気まぐれが、マコト、そしてロクヒトたちの運命を変えた。

ロクヒトがバルコニーへ足を踏み入れた瞬間、マコトの目の前を竜人が落下していった。

胸を押さえ、信じられないといった表情で地面へと落ちる竜人。

(マコトが、やったのか……。ん?)

一方のマコトはまだ警戒を解かず、新たな矢を取り出していた。その矢尻は紅く染まっている。毒が塗つてあるのだろう。

何故さらに矢をつがえるのか。不審に思い、足音を殺し横から回り込む。

マコトが構えるボウガンの先は、倒れたアキと、介抱するサリに向けられていた。

「おい、マコト……?」

突然かけられた声に驚いた様子のマコトは、目を見開きながらも矢を放った。狙いを外した矢は、アキのすぐ横の地面に突き刺さる。

「あ、あんた何を……」

ロクヒトが声を掛けなければ、矢が当たったアキは死んでいただろう。

問い詰めようとしたロクヒトの声は、短剣を抜いたマコトに遮られた。その刃からも、紅い薬品が滴っている。

「……」

無言のままロクヒトへと襲いかかってくるマコト。

「お、おっ? ……な、何しやがるっ!」

翼を動かして風圧を生み出し、ロクヒトは大きく後ろへ下がった。……」

やはり無言のまま、片手でボウガンに矢をつがえるマコト。

「何か、言え……う」

ぴたり、とボウガンの矢先を額に向けられ、ロクヒトはうめいた。(動けない……?)

右に動いても、左に逃げても、その矢はロクヒトを貫く。

そんな予感に脅え、ロクヒトはその場から動くことができなかつた。

「い、嫌だ……やめろ、マコト」
「……すみません」

小さく呟いたマコトは、矢を放つ。
紙一重でロクヒトはその場にしゃがみこんだ。意図しての行動ではない。死の恐怖に腰が抜けたのだ。

既にボウガンは必要無いと判断したか背に収め、腰の剣を抜くマコト。

紅く染まった刃の恐怖に身を縛られたロクヒトは。

「あ、あ、アキーっ!!!」

恥を捨て、叫んだ。

2・意思

一時的な酸欠によって完全に意識を失ったアキは、サリに揺り動かされて意識を取り戻した。足や腕、腹など、いたるところを切り裂かれ、出血は少なかったものの、猛烈な痛みを感じる。

「うっ、竜人、は？」

「よ、よかった……心配したん、だよ……」

痛みを堪え辺りを見渡し、仰向けに倒れる竜人を目に止める。

「サリがやったのか？」

「……え？ う、ううん」

どういうことか、と立ち上がりかけたアキは、地面につけた右手に衝撃を感じ、目を向ける。すぐ横、ほんの数センチの所に矢が刺さっていた。わずかに見える紅い矢尻は、毒の証だろう。

「う、うお？」

慌ててサリを抱え、横に飛ぶ。恐れていた追撃は無かった。

数歩で壁際の本の陰に隠れ、矢を観察する。方向を考えると、バルコニーからのものの様だった。人影は無く、逃げたか隠れたかしたのだろう。

「くっそ、誰だよ……」

良く見ると、倒れた竜人の背にも同じ矢が突き刺さっている。竜人を殺したのは、正体不明の狙撃手のようだった。

「……サリはここで待っていてくれ。俺は……」

確かめに行く、と言おうとしたところで、「アキー！」と叫びが聞こえた。

「……ロクヒト？」

考える間も惜しい。助走をつけ、一気に二階のバルコニーへ飛ぶ。手すりに手を掛け、腕の力を使い、降り立った。

そこには、剣を構えたマコトと、へたり込むロクヒトの姿があった。

「なんのつもりだ……、マコト？」

軸足をマコトに向け、一気に飛びかかれるように構える。

「……ふう」

立ち上がったロクヒトと、小刀を構えたアキにはさまれたマコトは、ため息らしきものを吐き、紅き剣を下ろした。

そのマコトを周りこむ様に移動し、アキはロクヒトを庇うように前に立つ。

「まず剣を捨てる。……理由を聞こうか」

できれば闘いたくはなかった。

一時仲間だった、ということもあるが、竜人をも一撃で倒した毒は危険に思えたからだ。運悪くかすりでもしたらそれだけで命を落とすかもしれない。

「……いくら私でも、あなた達二人相手にして生き残れるとは思いませんよ」

自嘲するように笑い、剣を投げ捨てた。

「竜人を殺したのはマコト、あんただろう？ 何故、ロクヒトまで……？」

「前竜人、……カゼサキの願いは、竜人による中央集権の再生でし

た」

「……わからないな。なら竜人は必要な存在だろうか？」

「多いのですよ。私が竜人になれない以上、一人いれば十分です。

……そう、知識と記憶を受け継いだ、ジュンがいればね。……彼を

王に据え、私とその補佐をする、これが理想でした。このまま四人の合議制なんてことになってしまえば、必ず対立が起きますからね。……少し、焦ってしまったようですけれど」

確かにそうだ。国が落ち着いてからゆっくりと暗殺すれば良かったのだ。

「俺は、王になる気は無いが。それでも邪魔なのか」

「問題は、竜人が存在するということですよ。今はそう考えていても、いつ心変わりすることやら。何しろ、竜人の寿命は無限に近いのですから」

「……仕方ない、な」

小さく呟き、アキはマコトを睨む。

「私を殺しますか？」

「……いや、動けないように……っ？」

アキの油断を突くかのように、突然背中から取り出したボウガンを構えるマコト。

慌ててロクヒトを突き飛ばし、アキ自身も大きく跳び退る。

一瞬前までアキのいた位置を矢が通過し、石壁に突き刺さる。

「くそっ」

こうなっては手段を選ぶことができない。

牽制変わりに、手に持った小刀を投擲する。

それは十分に予期していたらしく、あっさりと横に動きかわすマコト。ボウガンには新たな矢をつがえ、アキを狙う。

ロクヒトを探すと、こちらにも飛びかかる機を待っているようで、わずかに体を前傾させている。

次にマコトが矢を放った時がその機会だと分かってくれているだろうか。

少なくともマコトはそれに気付いているようで、じりじりと先ほど投げ捨てた剣に向かって移動している。

剣を取られては矢を放った後も安全とは言いがたい。

(使いたくはなかったが)

マコトに気付かれぬように少しづつ息を吸うアキ。

今回の咆哮は手加減する余裕が無い。人間のマコトは、気絶ですめば良い方だろう。ロクヒトはまがりなりにも竜人だ。なんとか意識は保てるはずだ。

「くっ

おおおっ!!!」

震える大気、舞い上がる埃、その振動は王宮すら揺らし、床にいくつも亀裂を造った。

びくり、と体を震わせたマコトが、勝ち誇ったように笑った。

どういう事か、いぶかしむ間も無くマコトは、アキの咆哮を食らい硬直しているロクヒトに向け矢を放った。

紅く染まった矢は、呆気なくロクヒトの翼を貫いた。

撃たれたロクヒトは倒れ、咆哮の衝撃と矢のショックに耐えられなかったか、あっさりと気を失った。

「りゅ、ロクヒトっ!」

完全な失神を見て取れたマコトはそのままに捨て置き、倒れたロクヒトに呼びかけた。

薄く広がった翼から、くたりと力が抜けていくのがわかった。

マコトの狙いを読みきれなかった悔しさと、ロクヒトに対する申し訳なさにアキは歯を噛み締めた。

「……くそっ、悪い、ロクヒト。俺を恨め!」

矢が刺さった翼を、根元から引き千切る。

「うっ? あああああっ!!!」

計り知れぬ痛み悲鳴を上げ、転げまわるロクヒト。

慌てて体を押さえ、アキは服を破り、傷口へと締めつけるように巻いていく。

「我慢しろっ、死ぬよりはマシだ！」

顔中に汗を浮かべながらうつめくロクヒトを抱え、中庭に飛び降りる。

着地の衝撃に再び悲鳴を上げるが、今は構ってられない。

「サリ！」

「う、うわあ？ ど、どうしたのそれ血！？」

痛みに暴れるロクヒトをうつ伏せに押さえつけ、サリを呼び寄せる。

「止血薬と造血剤と痛み止めを寄越せっ、早く！」

こくこくと頷いたサリ。鞆から幾つかの薬草と粉末を取り出し、まとめてロクヒトに飲ませる。

「これ、造血と痛み止め！」

「水は無いが、気合で飲め！」

目に涙を浮かべながら、必死で飲み下そうと口を引き結ぶロクヒト。

続けて酒と包帯を取り出し、「傷口、出して」

既に血で固まりつつあった服の切れ端を剥いでいく。

「や、やめっ痛いっ！」

「我慢だ」

暴れるロクヒトを全力で押さえつける。めきめきと骨が軋む音が響いたが、暴れて治療の邪魔になるよりは良い。

ふたを開け、瓶の中の酒を全て傷口にふりまくサリ。

「うつうつ……」

消毒の痛みも加わって、ぼろぼろと涙を流す。

集中しているのか、無言のまま止血用の軟膏を塗り、手際良く包帯を巻きつけるサリ。

「……ふう、一応、終わり」

叫びつかれたか荒い息をつくロクヒトへ、瓶に残った酒を飲ませる。

痛み止めの代わりか、先ほどの薬を流しこむためだろう。

「う……不味い」

顔を蒼白に変え、ぐったりと体中の力を抜くロクヒトを囲み、アキとサリは安心し小さく笑った。

第十章・裏切り（後書き）

アキ・竜神の持つ筋力、そしてそれに耐え得る骨格。内臓等も全て変化している。特殊な声帯により、咆哮を放つことができる。外見はごつごつした爪だけが変化している。

サリ・炎を吐く能力を得た。熟練により、口以外からでも炎を生み出すことができる。

ロクヒト・翼。空を駆け、一抱え程の真空の空間を作り出すことができる。

ジュン・歴代竜人の記憶。人の感情を読むことができる。悪意には敏感。金色の目を持つ。

終章・其は神聖にして不可侵（前書き）

最終話です。それぞれの生き様、彼らはこれからどうするのか。みなさんの予想と一致していたら、作者にとって幸いです。

終章・其は神聖にして不可侵

第九章・神聖にして不可侵

1. 赦し

マコトは、誰かに話しかけられていることに気付き、重い瞼を開いた。

覗きこむ様にマコトを見つめるジユンと目が合い、動揺して体を動かす。下半身は痺れたように動かないが、何とか上体だけは起こすことができた。

「アキから……話は聞いたよ。僕を王にするつもりだったんだってね」

静かに話すジユンに、怒りや失望は見られない。

そのことが逆にマコトの不安をあおる。

「申し訳ありません。出過ぎた真似をしましてしまい……お怒りになっているのではないのですか？」

恐る恐る訊ねる。

「マコトは、カゼサキを大切に思ってたんでしょう？　僕が怒る筋

合いは無いよ」

「あ、ありがとうございます……」「ただ」

と、と礼の言葉を遮られたマコトは不安に思い口を閉ざす。

「あの三人は、僕の大事な友人なんだ。……竜人として命ずる。今後、二度と竜人を手にかけることは禁ずる」

「……そ、それだけですか？」

「他に何を？」

極刑まで覚悟していたマコトにとって、拍子抜けとも感じられる判断だった。

2・旅路

「いつ、いえ。わかりました。二度と御友人に危害は加えません！」
「わかればいいよ。……君にはこれから宰相として働いてもらうからね。優秀な人材は、殺している場合じゃあないんだ」
「はい」

反射的に答え、マコトは耳を疑った。

宰相、といえは王の補佐だ。今の言いかたではまるで。

「……ジュン、あなたが王になるということですか？」

「そうさ。この国は、僕とロクヒトで治めることになった。不満かな？」

「ふ、不満などっ」

「……ああ、あるのは疑問か。元々ロクヒトは権力に対する願望が強くてね、真っ先に反対したのはアキだけなんだよ。……追従するサリもそれに従い、ロクヒトも一時は諦めたんだ」

では何故今更。声に出さないマコトの問いに、事も無さげに答える。

「マコトの覚悟を見て、って所かな。僕も隠遁するつもりだったけれど、翼の欠けたロクヒトだけじゃあ辛いだらうしね。……シンボルとしての竜人はロクヒトに、そして実権を動かすのは僕だ」

涙が出そうになった。

早まった行動をしたマコトを許すばかりか、新たな仕事まで与え、さらにカゼサキの遺志も叶えてくれたジュン。

「あ、ありがとうございます」

「初仕事だ、マコト。各領地の領主を集める……戴冠式の準備を整える」

「わ、わかりました！ お任せ下さい……竜人」

にこりと笑うジュン。その笑みにはカゼサキの面影がかすかに浮かんでいた。

次々と薬を鞆に詰め込んでいくサリを眺め、アキは頭痛を感じた。「なあ、サリ。本当にそれ、持っていくのか？」

一抱えはある鞆の口を縛り、それでもまだ不満そうにするサリへ、恐々と問いかける。

はちきれんばかりの鞆は既に四つとなっていた。

とてもサリに持つことはできないだろう。抱えて歩く自分自身を想像し、虚しいため息が漏れる。

「大丈夫、馬車があるじゃない」

馬車は街には入れない。宿まで運ぶのは誰だと思っているんだ。

「……まあ、いいか」

先ほどのことに比べれば、大した問題じゃない。

サリの父親、ハルに殴られた痕を擦りながらアキは苦笑する。

娘が竜人になり、さらにアキと旅に出る。そう聞いたときのハルの反応は、素早かった。何故か横にいたアキを殴りつけたのだった。くらくらする頭を押さえながら文句を言おうとすると、「娘が結婚する時には、相手をぶん殴るもんだ」と大笑いしていた。竜人のことは別に良いのか？ と突っ込みたかったが、実際どうでも良いのだろう。

あれも持て、これも持てと薦めるハルの所為で、鞆がまた増えた。

「ハル、それ以上は持てないよ」

「ああ？」

絡むように肩を抱き、ハル。

「てめえ、これくらい荷物が持てないとか言うのか？ お前竜人だろ？ そんでもって婿だろう？ 反対意見は聞いてねえ。大人しく言うこと聞きやがれ」

既にサリを嫁にやったかのような口ぶりだった。

このままでは誤解が真実になってしまふような気がして、アキは口を挟む。

「えっと、別にサリとは何も」「何も？」

ハルの目が危険な光を放つ。

「……結婚はまだ早いかと」

命の危機を感じたアキは、遠まわしに文句を言う。

「じゃあ、お前はサリのことを何とも思っていないのか？」

「そ、そういうわけじゃないけど」

「じゃあ、もう一度この村に帰ってくる気はあるのか？」

「な、無い」

「じゃあ……」

「お父さん。もう良いじゃない」

見ていられなくなっただか、やっとサリが口を挟む。

「で、でもよう」

「いーのいーの。じゃあ、婚約ってことで？」

助けてくれたわけではなかった。アキは本格的に頭が痛くなってきた。

「……うっ」

最早何を言っても解ってはくれないのではないかと、と厭世観にとられる。

だがこのままではなし崩し的に結婚となってしまう。まずはサリを説き伏せることにする。

「いいか、サリ。俺たちには、無限の寿命が手に入った」

「そうだね？」

「俺の夢は、この世の全てを知ることだ。その為には……こんな所に暮らしてる場合じゃあない。それもわかるか？」

「わかるよ」

「……俺は一言でもサリについてきてくれ、なんて言ったか？」

「うっん。でもそんなの当然。私の居場所はアキさんの隣にしかないからだよ」

それは勘違いだ。ただの錯覚に過ぎない。

「……なあ、いつか俺達は離れて、自分の道を行くんだ。いい機会じゃないか？ サリもそろそろ一人立ちしてみないか？」

「……いや」

聞き分けの無い子供のようにふいと顔を背けるサリ。

「なあ、アキ。お前の旅に、こいつは邪魔なのか？」

とうとう見ていられなくなったか、ハルが口を挟む。

「そうでなければ、連れて行って欲しいんだ。……結婚だの婚約だの騒いだことは謝る。それとは別に、こいつの生きる場所を探す手伝いをしてくれないか？」

「……卑怯だよ、ハル」

そんな風に言われては、断ることなんてできやしない。

「ん、そうかな？ 役にたつぞーサリは。今みたいに感情が絡まなければ、こう見えても交渉事には強いんだ」

そんなことは知っている。二年前、税を重ねて取りに来た役人を追い返したのは、長老でもアキでもなく、サリだった。

あらぬ方向を向いていたサリの頬がゆるむ。

お見通し、だな。

「……サリ。準備は終わったのか？」

「終わったよ！」

「じゃあ今すぐ出れるな」

「うんっ」

「……じゃあな、ハル。永遠の別れだ」

「ふん、縁起が悪い挨拶すんじゃねえ……たまには手紙寄越せ」

「じゃね、お父さん。手紙は私出すから」

「ああ。元気だな……言葉の通じない国では、笑顔を忘れるなよ」

「うん……ごめんね、お葬式だせなくて」

「いつの話だっ！ まだ俺は五十年は生きる！ 早く行ってしまえ！」

顔を真っ赤にして怒鳴るハルを目の端に止め、馬に鞭を入れる。

「いいのか？ あんな別れで」

隣に座り、手を振るサリに問いかける。

「いいの。お父さんは元気が一番だから」

「そうか、うん、そうだな」

しみみりとした別れなんて、ハルには似合わない。勿論アキにも、サリにも。

「今度この村にくる時には……」

「ん？」

「……うん。何でも無い。百年、二百年。いつになるかわからないけど、絶対またここに来ようね」

「そうだな……あいつらにも、また会いたいしな」

「うんっ」

安物の馬車、固い御者席。

決して恵まれた環境ではないが、アキは思う。

三千年以上もの時を過ごした竜人のことを。その昔、戦いの末に手に入れ、作り上げた国から裏切られた、たった一人の竜人のことを。

サリと共にいる限り、アキに寂しさというものは訪れないだろう。きつと、永遠に。

終章・其は神聖にして不可侵（後書き）

お疲れ様でした！貴重な時間を使ってここまで読んでくれて本当にありがとうございます！

希望があれば続編も書きます……一、二ヶ月ほど待っていただけたら。

えっと、とにかくありがとうございます。また次の作品も読んでいただけたなら幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1691a/>

竜人の血

2008年11月7日07時05分発行